

編み物用錘具としての自然石の研究

渡 辺 誠

I 研究の目的

ツチノコ・コモヅチ・コマ・ハチニンボウズなどとよばれる、もじり編み用の錘具に関する民具および考古資料について、かつて若干の考察を加えたことがあった（渡辺1976 a, 76 b, 77, 78）。その主旨は、1. 錘具を用いたもじり編みの技術は、縄文時代前期より現代まで連綿と続いたものであること、2. その製品には編布（アングイン）・カゴ・コモ・ス・スダレ・米俵・炭俵など、各種の日常生活に必要な品々が多数含まれていること、3. そして特に考古資料の解釈に援用すべき民具資料の調査には、記録上不完全な側面がきわめて強いことを指摘すること、などにあった。

これらの錘具の材質には、木・石を主に竹・粘土・貝・鉛・コンクリートなどがあるが、本稿では特に石の場合に限定することとする。その理由は、この石錘は木製品などと異なり加工が施されていないことが圧倒的に多く、発掘現場では自然石として研究対象からはずされていることが多いからである。

こうした観点とともに先の第1・2点との関連において、特に考古学研究者の関心を惹起する一助になれば幸いである。

II 民具資料の検討

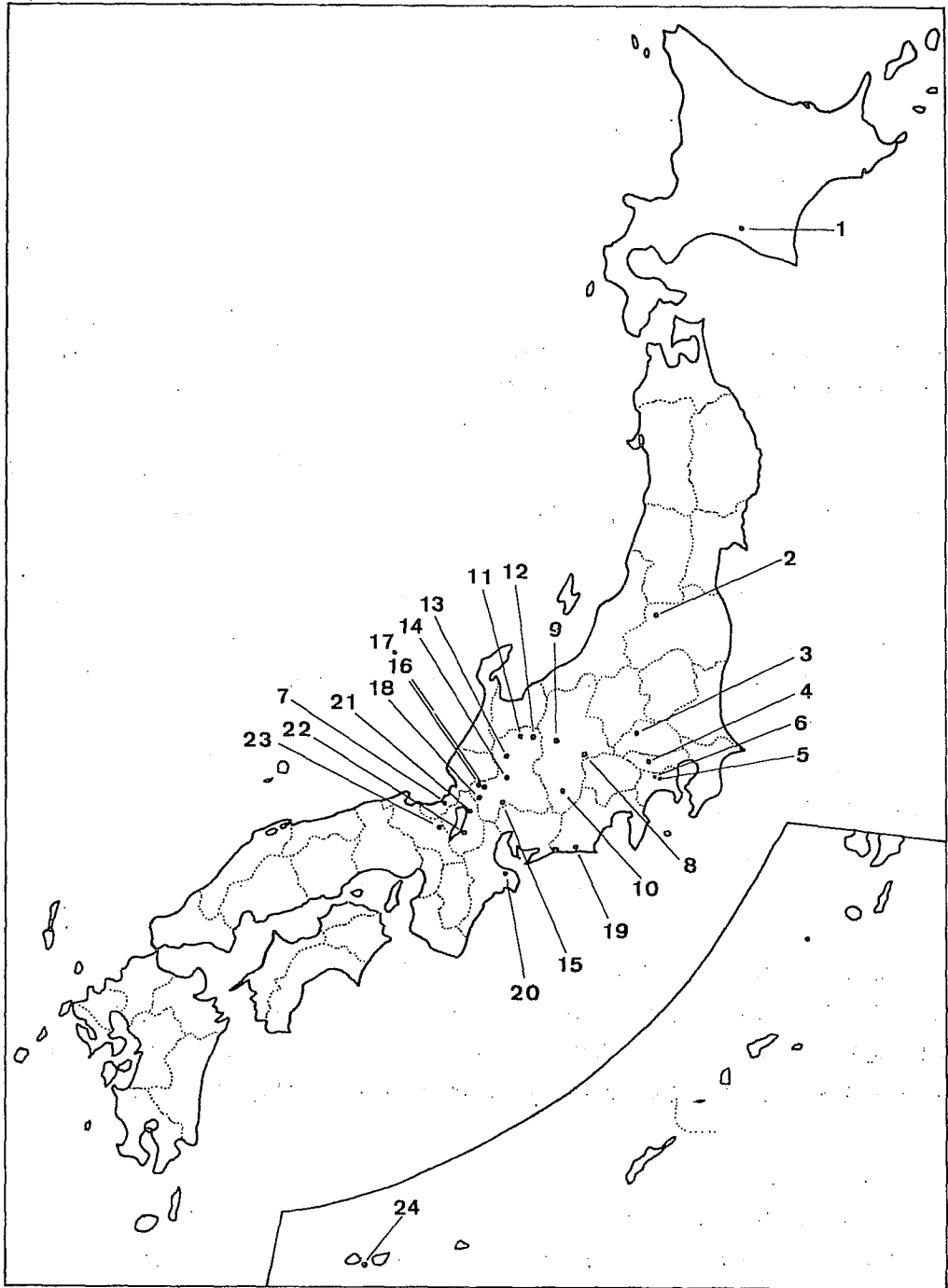
つい最近まで、また一部では現在でも使用されている石錘について、まず各地の事例を北から順に紹介することとする（第1図）。各事例については、a. その名称、b. 形態、c. 重量、d. 対象製品名とその材質、e. タテ糸の間隔、f. 同時に使用する錘の個数、g. 他の錘具との関係などを重点に紹介するが、考古資料との関係からは特にb・cとdとの関係が問題になるのである。

A 各地の事例

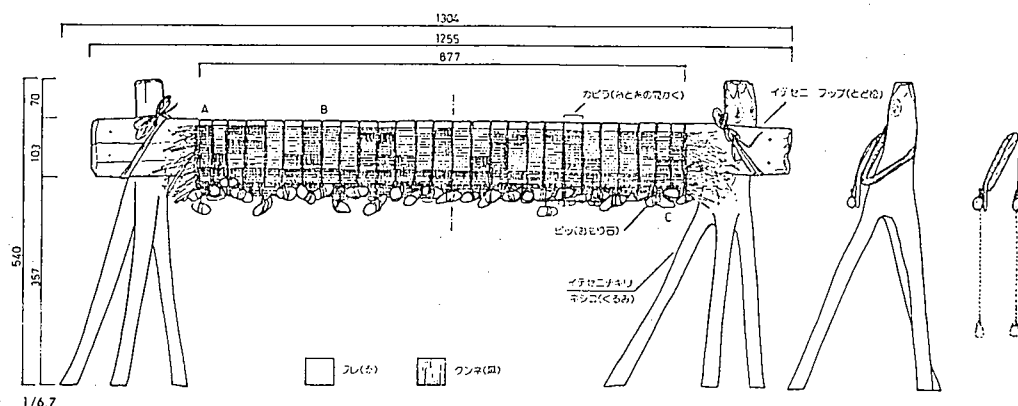
1. 北海道日高郡平取町二風谷

二風谷アイヌ文化資料館に保管されているごぎ編み機（イテセニ）について、萱野茂氏（1978）は次のように報告している（第2図）。

『イテセニというのはトマ（ごぎ）やサラニヤ（背負い袋）を編むときに使う道具で、……



第1図 民具資料としての編み物用石錘の分布



第2図 アイヌ民族のござ編み機(荻野1978より)

刻み目の一つ一つにピツという錘り石二つに半分ずつ分けて巻いたイテセカ（編み糸）をかけ、その上にシキナ（がま草）やチポァテニペン（木灰で煮たしなの木の皮）、あるいはかやを当てがって、一つ一つのピツを前後に振りかえてそれにかからませながら、トマやサラニャやすだれを編むのです。

キ（火棚の簀）やイサツケキ（干し簀）簀のたぐいの編み方もトマの場合と似ています。

ピツはトマを編むのに五十～六十個必要で、たいていの家はそのくらいの数を揃えています。特別大きい模様つきのポロニカブンペなどを編むときは八十個も使います。子供のころ祖母と沙流川の川原へこの石を拾いにいったものです。』

残念なことに、錘り石の寸法と重量に関する記載はみられない。また各製品群と重量の対応関係についても不明である。ただ第2図はアイヌ文化に特徴的な花ゴザであり、ここに使われている錘り石の長さは、カビラというタテ糸の間隔とほぼ同じか、やや大き目であるとみられるので、長さは平均3～4cmと推定される。

なおアイヌ民族中の類似資料については、杉山寿栄男氏の大著『日本原始繊維工芸史』（1942年）はじめ各書にみられるが、上記の条件をみたすような記載がないことは惜しまれる。

2. 福島県河沼郡会津坂下町青津

木本元治氏の御教示によれば、当地区の米俵などを編む錘はコモヅチといい、丸太を輪切りにした形態であるが、よく締める場合には、少し重めになる川原石を使うという。

3. 埼玉県秩父郡皆野町谷原（写真1・第1表）

写真1は谷原の小島米作氏が使用していた炭俵あみ台一式である（現小林英氏蔵，1977・11・7，大阪市立博物館にて調査）。

クリ製の編み台の高さ50.0cm，作業面の高さ（目盛の上面）44.5cm，長さ109.0cmで，目盛板には上下面に各4個の刻み目があり，その間隔は上面では平均17.5cm，下面では18.5cmである。

編みかけの俵はカヤ俵で、ワラ縄をまきつけた川原石の石鍾は、手前と背面に合計8個下がっている。長さは8.9~12.6cmで平均11.3cm、厚さは平均2.4cm、重量は136~256gで平均は178gである。

なお吉川国男氏はじめ埼玉県下の研究者によれば、同県下では炭俵および米俵編みに、自然石の石鍾はかなり一般的に使用されていたという。

4. 東京都多摩地方

東京都西多摩郡秋多町草花在住の塩野半十郎氏によれば、多摩地方ではかなり一般的に川原石で米俵を編んでおり、これをコマ石とよんでいるという。そして近年八王子付近の古代集落址の調査に際し、竪穴住居址内からしばしばコマ石が出土するにもかかわらず、加工や使用痕跡がないということで捨てられている、と嘆いておられたことは未だに耳に新しい。

同氏がこのコマ石を使用して実験考古学的に編布を編んでいることは、よく知られている。

小島弘義氏の御教示によれば、同じく多摩川北岸の府中市でも石鍾が使われていたという。

ただし、分布・重量・サイズ・他製品との関係についての詳しい報告はみられない。

5. 神奈川県相模原市下溝字下原

相模原市民俗資料館には、同地区座間末治氏寄贈のこもあみ台一式が展示されている(写真2)。編みかけのコモのタテ糸は4本で、8個の石鍾が下がっている。タテ糸の間隔は4寸(12cm)間隔で、その中はさらに4

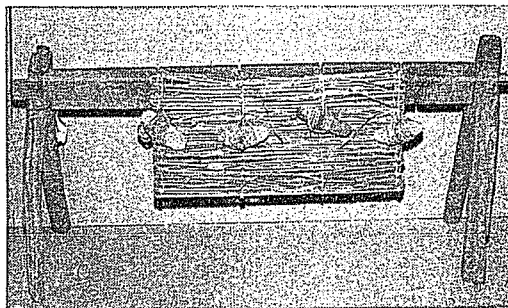


写真1 埼玉県皆野町谷原の炭俵編み

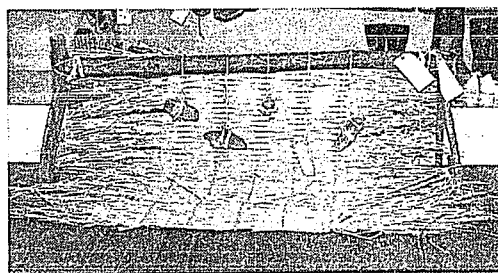


写真2 相模原市下溝のコモ編み

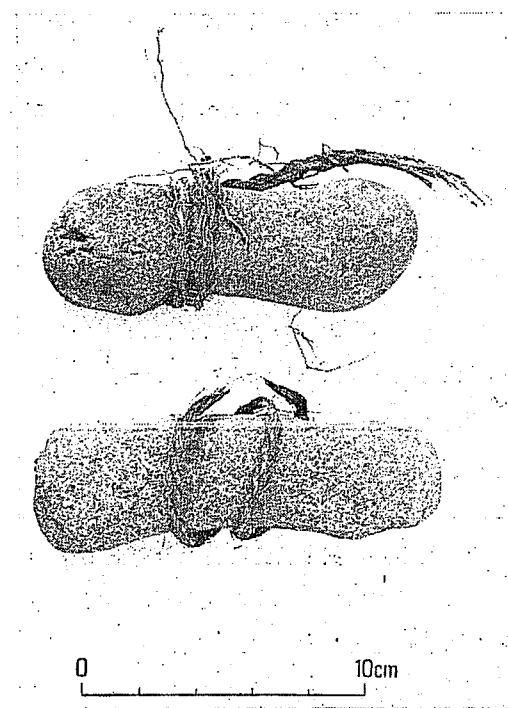
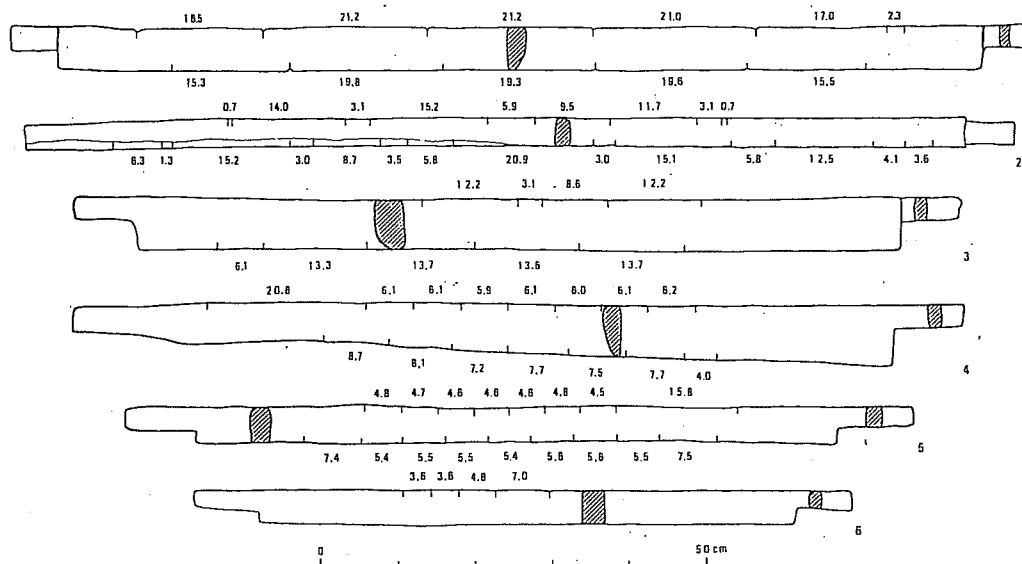


写真3 相模原市大島の石鍾



第3図 福井県三方町生倉における編み機横板の各種

分割され、1寸間隔の目盛が全体で36目盛りられる。

これはおそらく腰カゴなどを編むためのものであろうし、米俵の時は食糧庁の規格で7寸間隔であるから、7目盛が1単位となったはずである。

この米俵や腰カゴを編む時に、別の石錘を使わなかったか否かを知りたいところである。

8個の石錘の長さは8.5~14.0cmで平均10.7cm、重量は180~370gで、平均292gである。

6. 同相模原市大島

同じく相模原市民俗資料館に、大貫英明氏が大島地区で蒐集した2点のコモ編み用石錘がある(写真3)。中央のややくびれた川原石で、長さは上が13.0、下が14.1cm、重量は上が280、下が300gである。

7. 福井県三方郡三方町生倉

生倉の宇野信治氏宅には石錘を含めた各種の木製錘と、これらに対応する目盛板が多数みられ、きわめて多様性がある。

しかし1975年8月17日に同氏宅で拝見した時点では、すでにほとんど使用されなくなっていたため、目盛板で編んだ対象の明らかであったのは、第3図に示す6本のみであった。便宜上目盛の間隔を、直接図中に示した。

錘具は、写真4に示す5種があり、同1~4の4種は木製錘、5の1種のみ石錘であるが、上記の理由からバラバラになっているものもあり、不揃いである。

それらの計測値を一括表示すると第1表のようになる。数値は平均値で示し、カッコ内に最

第1表 写真4の鍾具計測値一覧表

番号	計測個数	長さ	巾	厚さ	重量
1	5	17.9(16.7~19.0)	8.7(8.0~9.6)	4.3(3.5~5.0)	346(280~420)
2	7	14.9(14.5~15.2)	7.2(6.6~7.7)	5.3(5.1~5.5)	362(330~390)
3	8	14.0(12.8~14.5)	7.0(5.9~7.6)	3.4(2.8~3.8)	176(155~190)
4	7	9.1(9.0~ 9.2)	8.0(6.7~8.7)	4.1(3.8~4.3)	149(130~170)
5	59(7)	9.3(8.0~11.3)	4.6(3.5~5.4)	2.7(2.0~3.3)	176(90~240)

大・最小値を示す。単位cm・g。ただし5の石鍾の長さ・巾・厚さに関しては7例のみの計測平均値である。

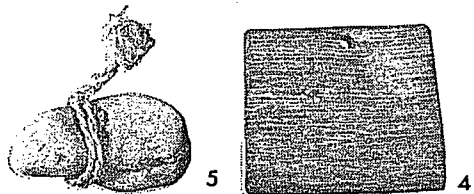
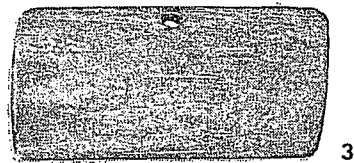
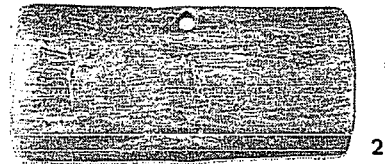
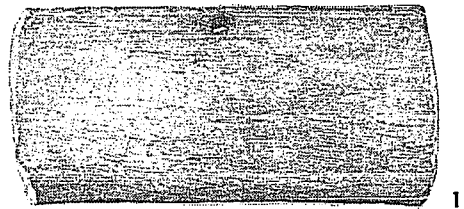
木製鍾の形態は、側面観は長方形で、断面は水滴形である。他地域例と同様に丸太を輪切りにして、さらに放射状に分割した後整形したかにもみられるが、製作工程については確認できなかった。しかし重量の分散範囲の広さにくらべて、長さのそれは狭く、機能上の要請を踏えて、上記の製作方法も十分推定できる。その上その数値を尺貫法に換算すると、1は6寸、2は5寸、3は4寸7分、4は3寸に相当し、5の石鍾もまた4に準じている。これは自然石をそのまま用いている。

重量に限定すれば、5種の鍾具は重い1・2と軽い3~5に2大別され、石鍾は後者に含まれる。

次に対象になった編み物から、横板と鍾具の関係をみていこう。

a. ヨシズ 降雪期に軒下の囲いに使う(写真5)。ヨコ糸にヨシを2本単位で使用。タテ糸は6本で、間隔は48cm(1尺6寸)である。この横板は残っていないが、写真4-1の重い木製鍾を用いる。

b. 米俵 第3図1の横板を使う。上がオモテ俵、下がウチ俵用の目盛である。上は7寸、



0 5 10cm

写真4 第3図に伴う鍾具

下は6寸5分である。この横板がもっとも使用率が高かったらしく、刻み目がかなり磨耗している。これは規格品で、4斗俵用であり、オモテは400匁、内は600匁、サンダラは100~110匁であった。内外共に写真4-2の木製錘(長さ5寸)を用いるが、特に内側の場合は強くしめて編んだ。

c. 炭俵 第3図2の横板を使う。横板に「炭俵 ヒレ八寸五分 ホ目7寸 重四〇〇匁 長四尺五寸」と墨書されている。消えているホ目は、7寸と推定される。対応する木製錘は、写真4-2または3である。ホ目とはタテ糸の間隔のこと。

d. ブリ俵 ブリ網の土をつめるタワラであり、第3図2の横板の上を使う。「ブリアミ目 ヒレ八寸 ホ目八寸」と墨書されている。米俵のように目をつめる必要がないので、4種の木製錘のどれにとは限定されないが、重いものとしめる必要はなかった。

e. シキコモ ワラをさらして編んだ。さらすと、濡れても変色しない。第3図3の上を使う。間隔は4寸。対応する木製錘は、写真4-4(長さ3寸)らしい。

f. フロコモ 第3図3の下を使う。間隔は4寸5分。対応する木製錘は、写真4-4(長さ3寸)である。マコモをワラシベで編む。

g. トイタコモ 第3図4の上を使う。間隔2寸、ヨコ糸はチグサであるが、ミノゲもはいつている。ミノゲだけはペラッとなる。タテ糸はワラのスベである。これはワラの芯で、打ってさらし、またうつとくさらない。石錘を用いる。

h. ホンタゴモ 第3図5の上を使う。間隔1寸8分。石錘を使用。

i. ヒンタゴモ 第3図5の下を使う。間隔1寸8分。石錘を使用。

j. コシミノ 第3図6を使う。図の左がコシミノの上で、下(右)に向うほど間隔が広がる。石錘を使用。

k. テゴ ワラをワラのスベ、ショロ、紡績糸などで編む。製品の間隔は6cm、石錘を使用。

l. 小さなテゴ 落穂拾いに使う。間隔3cm。

m. ヒオイ 製品の間隔は6cm(2寸)。写真4-4の木製錘(長さ3寸)を使用。

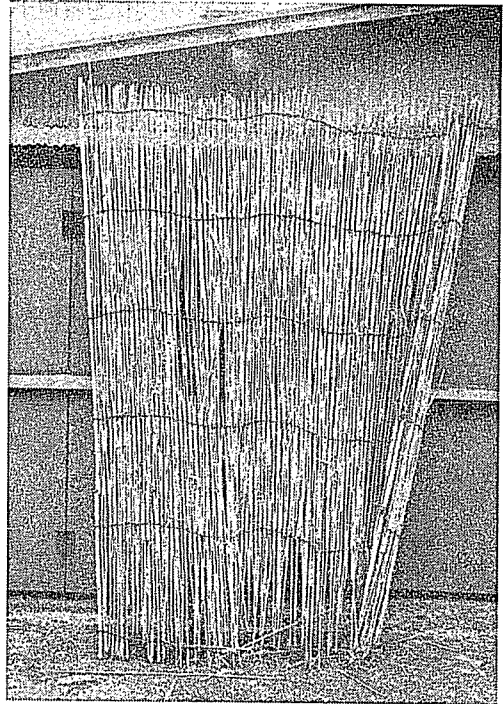


写真5 雪囲いズ

次に製品群と錘具と重量との関係を整理すると、次の4群に大別される。

第1は、重い木製錘を使う雪囲いズと米俵である。しかし雪囲いズに関しては同県勝山市内の諸例(渡辺1978)に比較すると軽量に属し、本来2群に分かれる可能性が高い。

タテ糸の間隔も前者は1尺6寸で、6寸5分～7寸の后者の倍以上ある。

第2は、重量をあまり気にしない炭俵・ブリ俵である。

タテ糸の間隔は7～8寸であり、この点は米俵と同じであるが、米俵より製品としての厳密さを要求されていない製品である。

第3は、軽量のかつ短か目の木製錘を使うシキコモ・フロコモ・ヒオイなどのコモ類である。タテ糸の間隔は前2者が4～4.5寸、后者が2寸であり、后者は次の4群に近い。

そして第4は石錘を使うグループで、トイタコモ・ホンタゴモ・ヒレタゴモなどのコモ類やコシミノ・テゴとよばれる腰カゴなどである。

いずれもタテ糸の間隔が2寸以下に限定されているのが特徴であり、しかも同じ長さの木製錘(写真3-4)で不足する重量を、自然石に求めたと理解することができる。

8. 長野県諏訪郡富士見町

富士見町境にある井戸尻考古館の武藤雄六氏の御教示によれば、この付近では木製錘とともに石錘も多い。そしてその石錘は川原石でなく、縄文遺跡で採集された自然石や石器であって、同氏の父親の石錘のなかには磨製石斧もあったということである。農家の人は錘にするために、昔はよく遺跡に石器を拾いに来たそうである。

9. 塩尻市芦ノ田

旧洗馬村芦ノ田の熊谷今朝美氏より平出遺跡考古博物館に寄贈された多量の石錘がある(写真

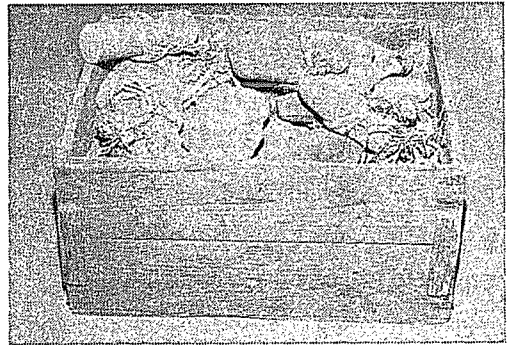


写真6 塩尻市芦ノ田の石錘と木製錘

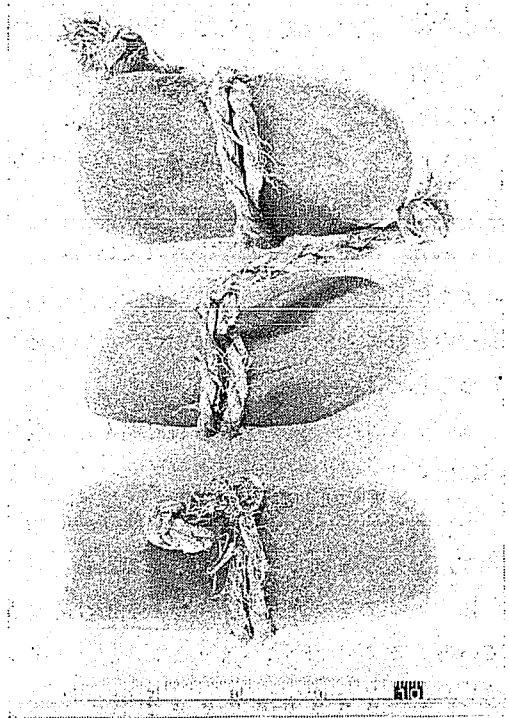


写真7 写真6中の石錘

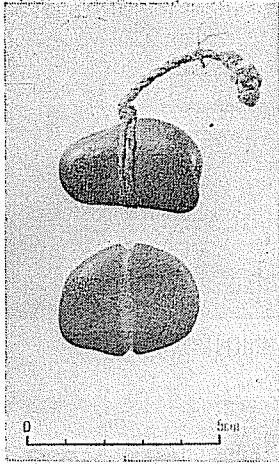


写真8 岐阜県丹生川村
久手の石錘

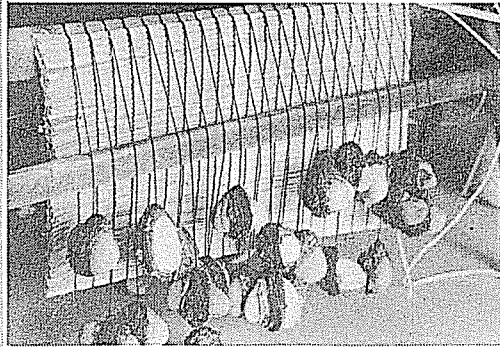


写真9 岐阜県荘川村牛丸の
テngo編み
(安藤正義氏提供)



写真10 写真9に伴う石錘

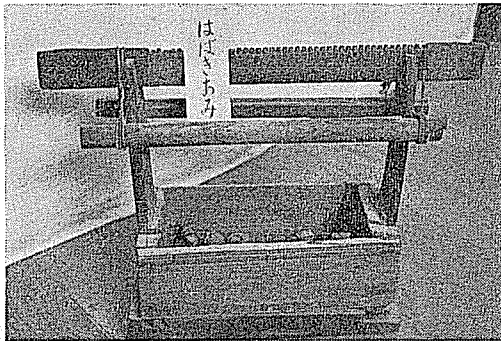


写真11 岐阜県八幡町のハバキ編み(安藤氏提供)

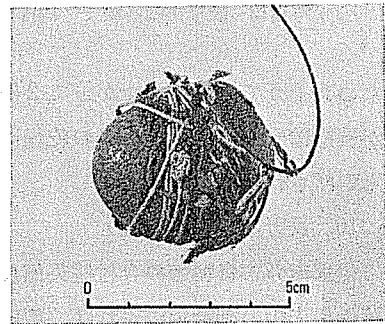


写真12 写真11に伴う石錘

6)。俵やムシロ編み用で、フンドとよばれている。分銅の意味であろうか。

総数51点で、いずれも長目の川原石であり、最小8.5～最大16.1cmで、平均12.5cmである。平均重量は282gである。大部分の例は中央がややくびれており、紐かけに利用しているが(写真7一中)、長目なので特にくびれてなくても使用されている(同下)。そして1例のみ紐かけ用に打欠きを施した例があり、注目される(同上)。

またこれらの中に、2点の木製錘が混じっている(写真6の左上)。木の枝を丸太に切っただけのもので、使い方は同様である。第1例は長さ11.6、孔3.5cm、重量91g、第2例は長さ8.5、孔3.5、重量48gであり、きわめて軽い。

平出遺跡考古博物館の花村格館長および小林康男氏の御教示によれば、この地域は木製錘より石錘を使う場合ははるかに多い。

そして木製錘を使うのは、石錘がとっさに足りない時に、かたい生の木を切って間に合わせる

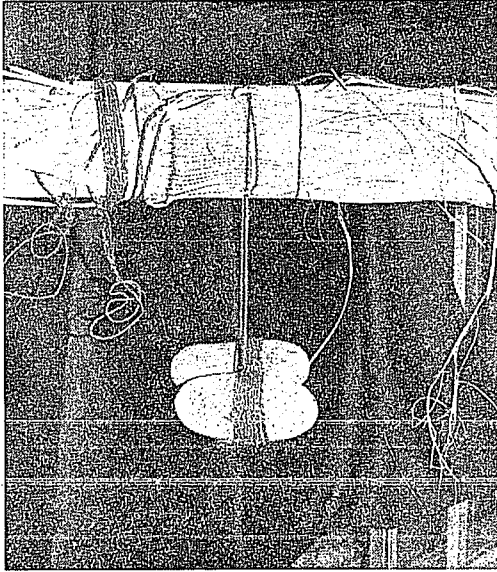


写真13 岐阜市鶯匠腰ミノ編みの石鍾

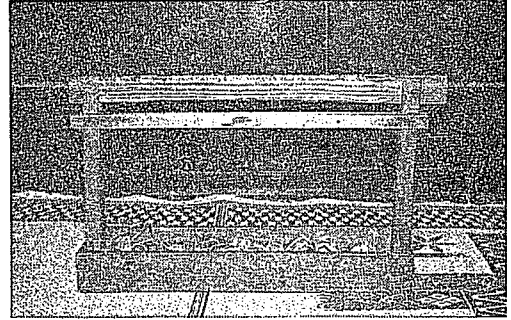


写真14 岐阜県徳山村榎原のハタゴ

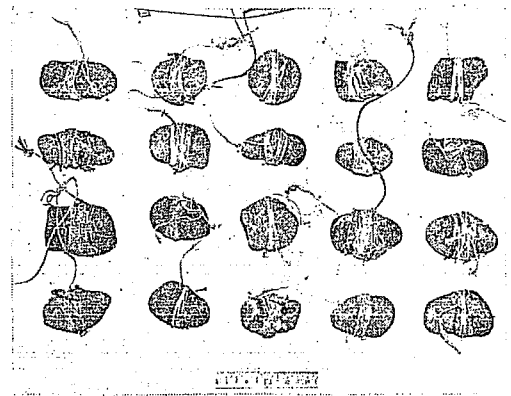


写真15 写真14に伴う石鍾

ためだそうである。したがって2例の木製鍾が極端に軽いのは、その後の乾燥によるためと理解される。

10. 長野県飯田市付近

伊那市考古資料館の今村盛英館長および佐藤甞信先生の御教示によれば、飯田市近辺の俵編みには、川原石を使うことが多いという。

この飯田市と8の富士見町の例は具体的な資料の報告を欠くが、少なくとも東信・中信・南信には石鍾の使用が盛んであったことがうかがえるのである。

11. 岐阜県吉城郡国府町

国府町立民俗館には木製鍾とともに、長目の川原石を用いた石鍾が陳列されている。そしてこのなかには、中央に紐かけの打欠きを施した例が含まれている。

12. 岐阜県大野郡丹生川村久手

久手で使われていたハバキ編み用の石鍾を、高山市下二之町の喫茶店『京』の西村京子さんよ

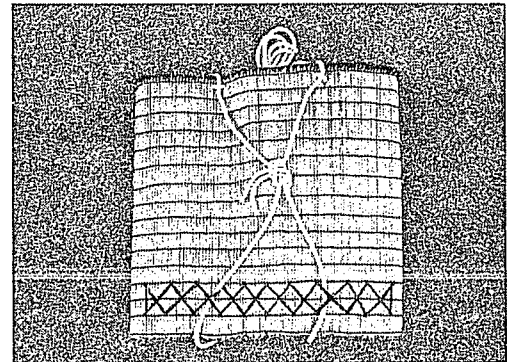


写真16 岐阜県徳山村榎原のガマテンゴ

り寄贈して頂いた。寄贈された石錘は37点であるが、紐の切れていたのは捨ててしまった由である。よく使われていたらしく黒光りしている。

紐はいずれも短軸中央にしぼりつけられており、そこに切目のみられる例(写真8)と、みられない例がある。

前者は27例で多く、後者は3例のみである。しかし両者にサイズの差はない。長さは3.3~7.0cmで平均4.2cm、巾は1.4~4.9cmで平均2.6cm、厚さは0.9~2.2cmで平均1.5cm、そして重量は14.2~71.5gで平均21.6gである。

13. 岐阜県大野郡荘川村牛丸

杉下志ずさん宅では、テンゴ(背負い袋)を編む錘に石錘を使っている(写真9)。写真10はその石錘中の1例である。長さ4.3、巾6.5、厚さ4.2cmで、一見タテ長であるが、実際は石質がやわらかいためぶつかりあってやせただけであり、本来はヨコ長の形態である。重量84.4gである。

14. 岐阜県郡上郡八幡町

八幡町の奥美濃郷土館陳列中の『はばきあみ』一式中には、多数の石錘が含まれている(写真11)。目盛板と錘具の収納箱がセットになるのは、美濃・飛騨地方の特徴であるらしい。高さ約36cm、刻み目の数は45で、その間隔は5mmである。

安藤正義氏によれば、つるりとした小さな川原石に、すべり止めのため麻布を巻いており、重量は21~62gで、30g台が50%である。写真12はそのうちの1例であるが重量61.9gであり、このなかではもっとも大きい例の一つである。長さ4.6、巾3.6、厚さ2.7cmである。

15. 岐阜県岐阜市長良川

岐阜市中央公民館に保管されている鶺鴒習俗関係民具中に、鶺鴒匠の腰ミノ編み一式がある(写真13)。台のはずれた目盛板と編みかけの腰ミノ、および石錘2個である。目盛板には刻み目は4箇所あり、その間隔は左より2.0、6.0、8.3cmである。現在石錘が残っているのは左より3番目の刻み目の部分のみである。石錘は長目の川原石で写真13の手前は、長さ11.0、巾5.1、厚さ2.8cm、重量248g、奥の方はそれぞれ11.0、4.4、3.5cm、272gである。腰ミノの材質はワラで、編み糸はシュロらしい。

16. 岐阜県揖斐郡徳山村榎原

竹藪ヤスノさん宅では、写真14に示す編み機をハタゴとよんでいる。材質はスギ。テンゴとよぶ背負いカゴ(写真16)、およびハバキを編む。コモ編み機は別にある。

テンゴとハバキとでは、タテ糸の間隔が違ふ。刻み目をつけた板はとりはずし自由で、対象に

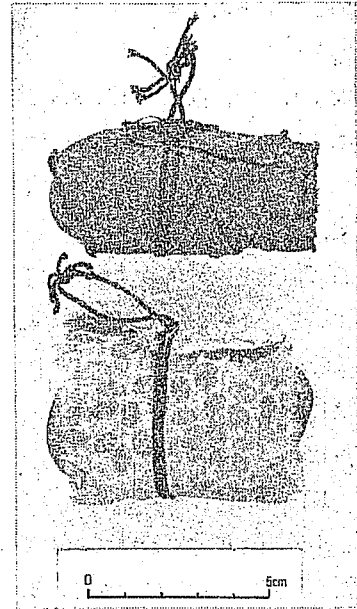


写真17 岐阜徳山村塚の石錘

応じて上下の向きをかえる。ハバキの場合は20キザミで、間隔は1.4cm、テンゴの場合は21キザミで、間隔は1.9cmである。目盛りのある範囲のみ板の前面はそげている。

これに伴う錘具はどちらにも共通した石錘で、下の箱にしまっており（写真15）。川原石に加工を加えず、横糸に木綿糸をまきつけている。その計測値は、長さ4.5～8.5cmで平均6.3cm、幅は2.4～5.3cmで平均4.0cm、厚さは1.8～3.7cmで平均2.6cm、そして重量は35～125gで平均72.6gであり、重量の分布範囲は広い。

17. 同徳山村塚

小沢利之氏宅において、木製錘とともに石錘を拝見したが、両者の重量は異なる。32点の木製錘は35～60gで40～50g台が多く、テンゴ編みに使われる。これに対し小さな川原石に布でくるんだ石錘は平均111.5gで、木製錘の2倍を占める。6点みられた石錘の長さ・巾・厚さの平均値は、それぞれ7.7、4.0、2.9cmである（写真17）。聞き取りが不完全なため、編む対象については分らないが、一緒に保管されていたことからみて、同時に使われていた可能性も否定できない。

18. 岐阜県揖斐郡坂内村諸家

谷口久七氏宅では、ハバキ編みに石錘を使用している（写真18）。目盛板は文字どおり板で、板の上端には1.0～1.8cm間隔で刻み目があり、これだけ近接した石錘が前後に交錯しないように考えられている。これに伴う石錘は、安藤正義氏の御教示によれば長さ8cm前後であり、その重量は100～180gで、平均129gである。自家製の和紙を巻いて紐が抜けないように工夫されている（写真19）。

19. 静岡県磐田郡豊田町の石錘

野本寛一著『石の民俗』（1975）中に、次のような記載がある。写真もみられ、長目の川原石である。

『俵編みには合計8個の石の錘（おもり）が用いられる。径6センチ、長さ12センチほどの石に経になる細縄を巻き、2個ずつを1組としてそれを交互に交差させて編んで行くとい

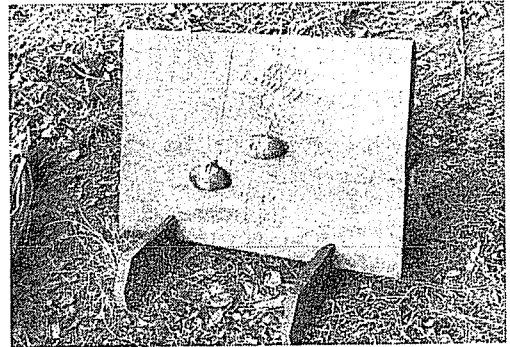


写真18 岐阜県坂内村諸家のハバキ編み機
(安藤氏提供)

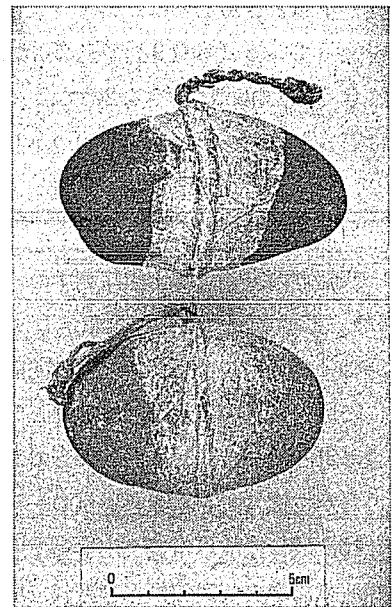


写真19 写真18に伴う石錘

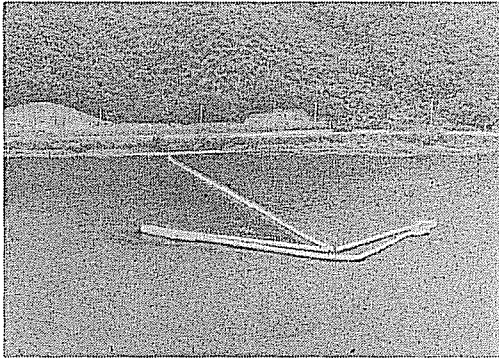


写真20 琵琶湖のエリ(塩津浜)

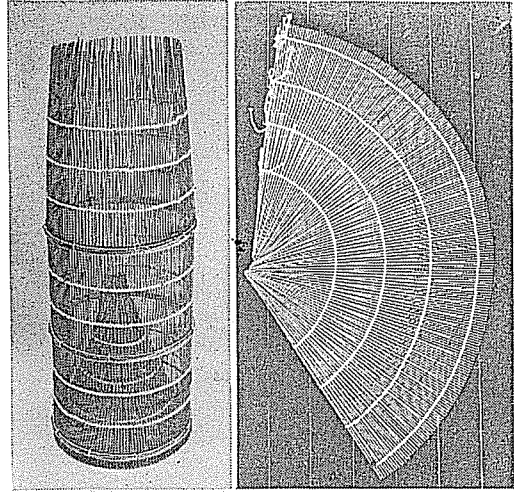


写真23 ウエ(左)とそのノドの展開(右) 守山市木浜

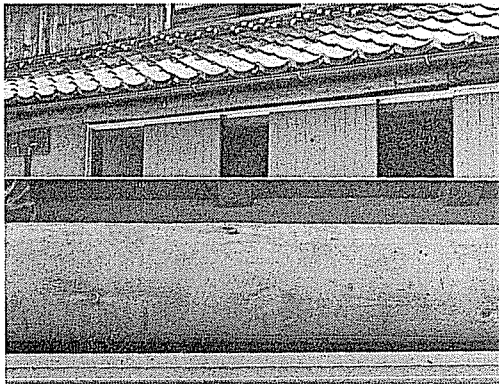


写真21 軒下につるされたエリス編みの丸太(上)とその目盛(下) 湖北町尾上

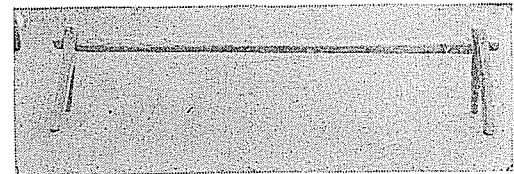


写真24 滋賀県守山市木浜のウエ編み用編み台

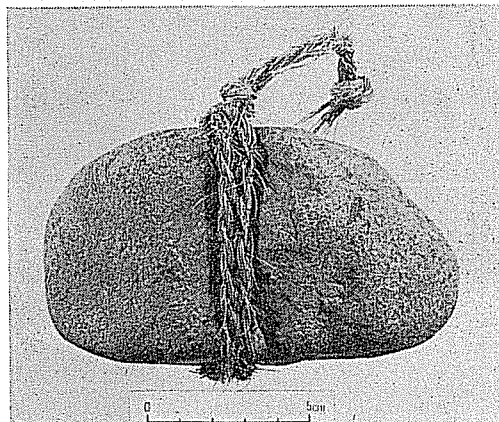


写真22 写真21に伴う石錘

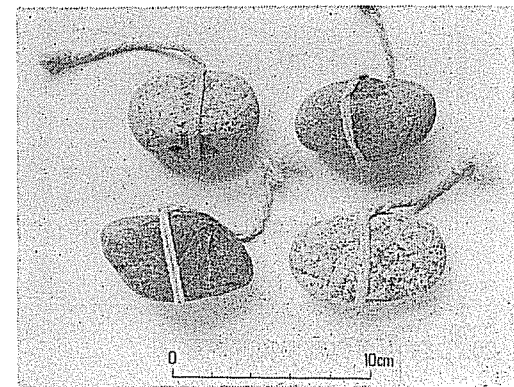


写真25 写真24に伴う石錘

う形式である。カチ、カチという石の響きとともに俵が編み進められて行くのだ。静岡県磐田郡豊田町ではこの8個の石のことを「八人小僧」と呼んでいる。あっちへ行ったりこっちへ来たりする石はたしかに小僧といった感じで、8個あるから八人小僧なのだ。この錘に桜の木を使う地方もあるが、やはり、石の方が俵の

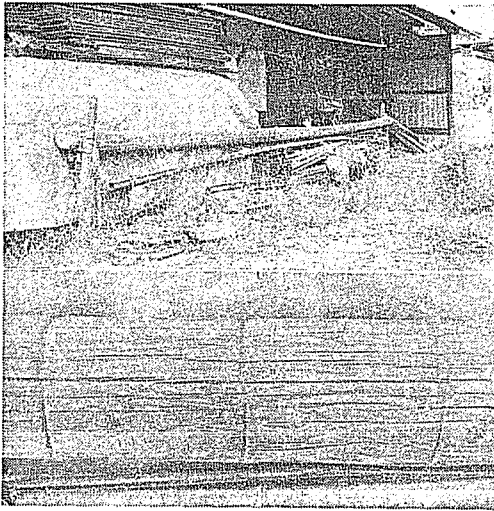


写真26 エリス編みの丸太(上)とその目盛(下)

守山市木浜

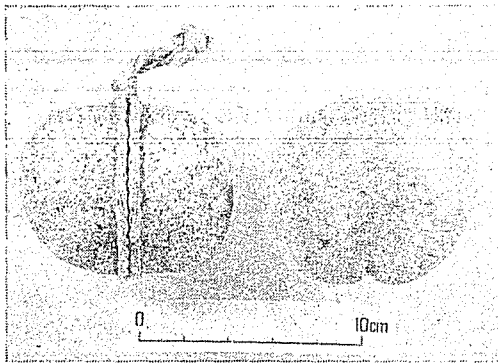


写真27 写真26に伴う石鍾

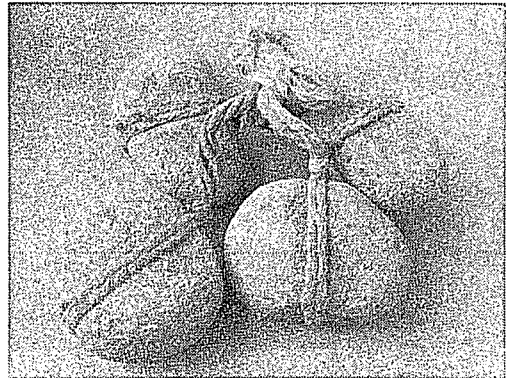


写真28 エリス編みの石鍾

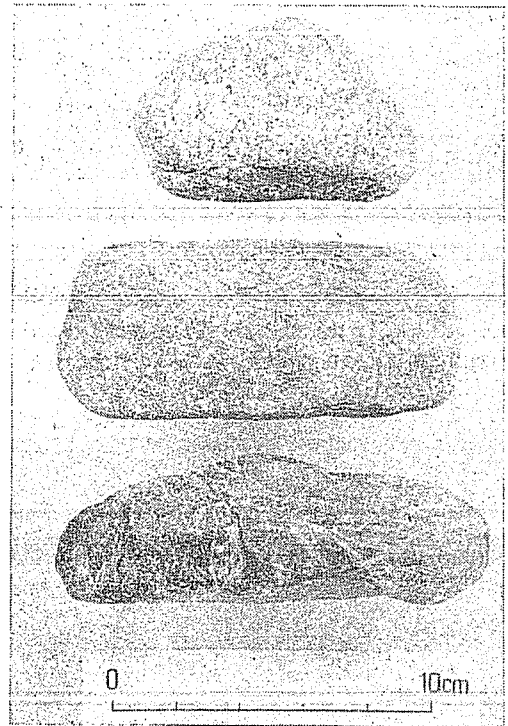


写真29 エリス編みの石鍾

しまりが良いようである。』

20. 三重県多気郡明和町齊宮

齊宮跡発掘調査に協力している地区の作業員の方々によると、このあたりでは手頃な川原石をもってきて米俵を編んでいた。この石に特に名前はなかったという。

21. 滋賀県東浅井郡湖北町尾上

エリは琵琶湖の漁業と風物に欠かせないものである(写真20)。このエリをたてるためには、大量のスが必要とされる。このスは本来竹製であったが、10年ほど前からビニールパイプ製に変

わりはじめた。竹製のスは、余裕のある人は女の人を頼んで編んだが、大多数の人は木浜^{このはま}から買った。

写真21は平田好三氏宅の軒下でみかけたス編み用の目盛のついた丸太で、ヒノキ材である。長さ18尺で、5寸間隔の36フがつけられている。フに布の字をあてる人もいる。これで編むには4～5人でしたが、両端をネを受持つ人は特に上手な人が選ばれた。

エリにはフナなどを対象とする荒目エリと、コアユなどを対象とする細目エリとがある。細目の場合は、竹の間隔は1分目で、荒目は5分目である。荒目を編むのは太目のワラ縄で、目が荒くなるように1目撚りをかけながら編んだ。

編み石は昔は自然石(900～1000g)であったが、平田氏は5～6年前にビニールパイプにセメントをつめたものを作ってもらったという。石と違い重さが一定にそろえられるし、面倒がないので都合であるという。写真22はたまたま残っていた1点を寄贈していただいたものであるが、長さ12.0cm、巾6.9cm、厚さ6.3cm、重量は875gである。

22. 滋賀県守山市木浜

木浜では、エリス編み用の石錘について3件、ウエ作りに使用される石錘について1件調査した。

a. ウエ作りの石錘

ウエ熊という屋号をもつ乗田宗法氏宅では、ウエを作る時のホイ編みに石錘を使用している。ウエは筒状の皮と、かえしに当るノドから構成されている(写真23)。そして、編む時は、ノド編みはすわって、皮を編む時は立って編む。写真24は前者の編み台で、全体の高さ36.0cm、巾157.5cmである。立って皮を編む時は、あみ竿(目盛板)はそのまま、足をとりかえるだけである。フ(刻み目)の間隔は平均8.53cmである。

米俵を編む錘は木製であるが、ウエ編みは石錘である。石だと小さくても重みがある。俵とちがってウエは糸も細いから、石でもよいのである。ノド編みと皮編みに使用中のものを各2個ずつ拝見したが、前者は長さ6.7～7.0cmで重量は150g、後者は長さ7.6～8.2cmで重量は175gであり、やや重い(写真25)。身と皮ばかりでなく、ウエの大小によっても、重量は少しずつ加減するという。

b. エリス編みの石錘

写真26は葎本信次郎氏のエリス編みのための作業小屋である。天候に関係なく仕事ができるように作られたもので、かつての盛んな様子がしのばれる。ここにある丸太は両端を杭をうって結び、中間にはスの重さでたわむので竹をかましたりした。直径は約12.5cm、全長6.40mで、ヒノキである。スギでは折れることもある。

フは37刻まれておりその間隔は5寸で、1人で7のフまでが都合よく編めた。編むのは女で、立って編んだ。

これに伴う石錘は、野洲川を約14kmさかのぼった石部の方へとりにいったものであり、杭の下

にたまたま2点残っていたので寄贈して頂いた。短軸の両端を打ち欠き、部厚い腹の部分も紐かかりのよようにたたいており、きわめて興味深い(写真27)。その計測値は、左が長さ9.1, 巾7.8, 厚さ5.9cm, 重量635g, 右がそれぞれ9.0, 7.3, 5.0cm, 475gであり、重量の平均は505gである。

c. エリズ編みの石鍾・2

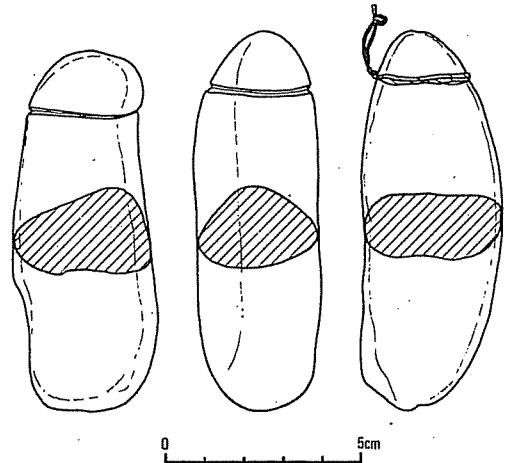
同様に打ち欠きのある石鍾は、田中久一氏からも4点寄贈された(写真28)。長さは9.2~10.9cmで平均10.0cm, 巾は5.3~8.5cmで平均4.9cm, そして重量は平均568gである。

d. エリズ編みの石鍾・3

前2者のエリズ編み石鍾と異なり、打ち欠きのみられない長目の川原石を用いた石鍾を、今江しずさんより5点寄贈して頂いた。写真29はそのうちの3点であり、長さは平均11.5cmで、重量は平均360gである。

23. 京都市左京区久多

京都府総合資料館には、久多より寄贈されたハバキ編み用とみられる石鍾26点が保管されている。つるりとした小形の川原石の上端近くに、溝が一周しているのが特徴的である(第4図)。長さは9.2~11.5cmで平均10.3cm, 巾は2.8~5.4cmで平均3.7cm, 厚さは1.7~2.8cmで平均2.1cm, 重量は81.5~142.5gで平均107.9gである。



第4図 京都市久多の石鍾実測図

24. 沖縄県黒島

1980年5月17日放映のテレビ番組『サメに救われた男の話』の中で、多良間嘉奈氏が長目の川原石を用いて、クバでミノを編んでいるのが紹介された。

B 比較検討

以上の24地区27事例は必ずしも十分な量ではないが、従来ほとんど関心が払われていなかったのであるから、問題提起にはなるであろう。これらの資料にもとづいて、本節では順次その問題点を検討していくこととする。

1. 分布の概況

まず地理的分布状態をみると、断片的ではあるが北は北海道から南は沖縄県の黒島までの全国に及んでいる(第1図)。特に西関東から中部地方にかけて集中しているかの感があるが、これは筆者の調査地域のかたよりと無関係ではない。しかし調査地の選定等の時点での情報によれば、

これらの分布状態が必ずしも実態とかけはなれてはいないともみられる。今後の各地の報告が期待されるところである。

この分布の問題を検討するに当っては、もじり編み用錘具の主体は木製錘であること、そして木製錘の形態は明確な地域性をもっていることなどに留意する必要がある。木製錘の諸形態とその分布状態は、いずれ稿を改めて詳述する必要があるが、今その概要を記すと次のとおりである。

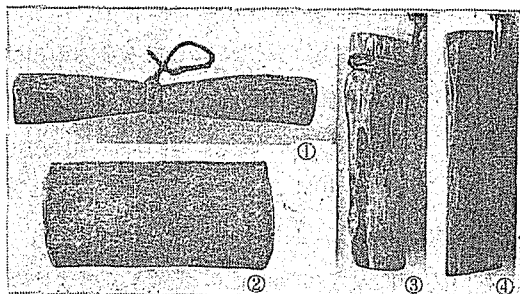


写真30 木製錘具の基本形態

木製錘の形態は二大別される。その第1は丸太ないしは鼓形を呈す形態(写真30-1(で、第2は丸太をミカン割りにしたもので、正面からみると長方形、側面からみると逆三角形を呈す形態(同2)である。そしてヨコ形のこれらに対し、それぞれタテ形の形態がある(同3・4)。前者は弥生時代中期から現代に到るまでもっとも普遍的に分布する形態である。これに対し後者は、古墳時代・奈良時代にも散見するが、本格的に発達するのは江戸時代以降であるらしい。その地域も中部山岳地帯から鳥取県以北青森県までの日本海側にかけてであり、これらの地域では次第に前者の形態を駆逐してきている。本稿でとりあげた石錘に伴う木製錘は、事例7のようにミカン割り形が多いが、事例9のように丸太形もみられる。

石錘はこの木製錘の全国レベルでの地域性とは別に、第一義的には川原石に豊富に恵まれた各地域で使用されているのであり、分布状態を規制する条件のレベルを異にしている。このために石錘の形態や名称などは木製錘との共通点が多く、かつ併用されていることが多い。この環境条件の差違は、次章で検討する考古学的資料の分布とも共通するところの、時代差を越えた条件として重視されるのである。

しかしさらに詳細にみると、石錘のサイズ・重量などと対象製品との間には一定の対応関係があり、その製品によっては地域性がある。したがって特に小形の石錘は、その有無が地域性の問題として検討の余地がある。それらを検討する前にこの対象製品がどれだけあるかをみてみよう。

2. 錘具を使用するもじり編みの対象製品

錘具を用いるもじり編みの対象製品については、すでに旧稿(渡辺1976a, 78)において暫定的な分類を示したが、本稿ではこれらを含めて次の4群に分類することとする。

これらの製品は、その目的に応じた形態・サイズ・材質に対応して、編む時のタテ糸の間隔が規制され、それを維持する錘具の形態・サイズ・重量・個数などもこれらに伴って変化している。したがってまずタテ糸の間隔を主に分類し、後に対応する石錘のあり方を検討することとする。

第1群は、タテ糸の間隔が1cm前後のもので、編布(アングン)とハバキなどが含まれる。新潟県中魚沼郡津南町の歴史民俗資料館に保存されている、アングン用目盛板の間隔は9mmである。

ハバキには目の粗い例と細かい例とがあり、もっとも細かい例では7mm前後のものさえある。後者は積雪地帯に多い。いずれにしても全体の巾はほぼ同じであるから、細かい場合はそれだけ錘具の量が増え、4,50個を必要とするし、アンギンではさらにその倍以上の個数を必要とする。

アンギン用錘具は木製品などで石錘はないが、ハバキの場合はハバキ石と称して、特に岐阜県に多い。事例14・16はこの好例で、12も同様と推定される。

第2群は、間隔が2,3cmから数cmのもので、間隔の広いハバキの他に、腰カゴ・背負いカゴ(テンゴ)に代表される。他に紙漉きスをはじめ各種のスノコ、アイヌの花ゴザなどのコモ類もこれに含まれる。ガマヤワラ製品が多い。

事例2・7・13・16~18・23などがこれに相当する。このうち事例16は、第1群のハバキと共有して使われているらしい。対象製品には多様性があり、同時に使用される石錘の量は一定しないが、事例2では56個下がっており、事例7では59個、23では26個現存し、他の事例の数量は数えていないが、これに準じる数量とみなされる。

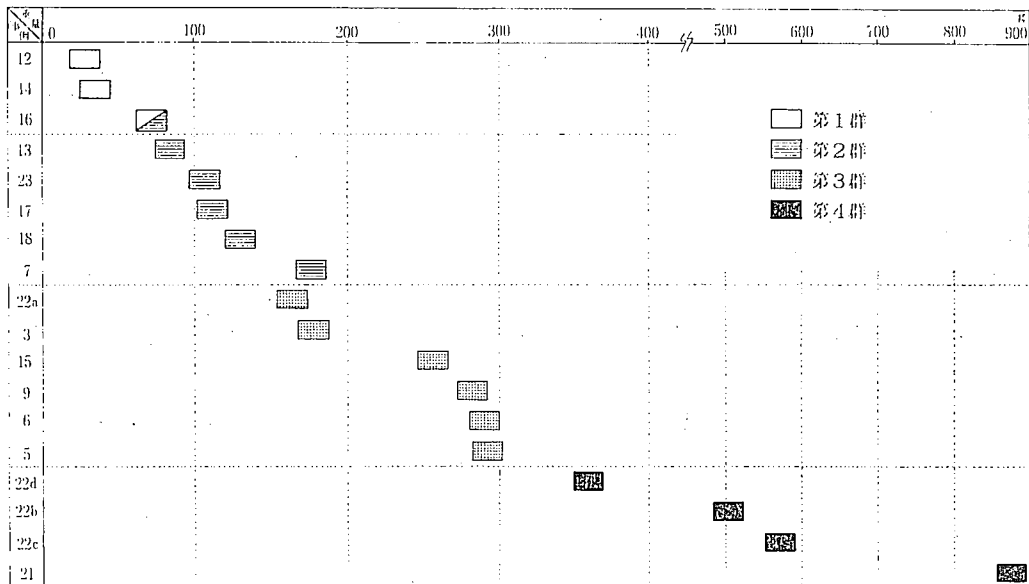
第3群は、間隔が10~20cm前後の米俵・炭俵およびムシロ・各種のコモ・ミノ・ウエなどである。これらの材質にはワラが多く、またカヤも少なくないし、竹やクバの例もある。これらに使われる錘具の数は、第1・2群や第4群にくらべて少ない。特に米俵・炭俵は8個と決まっている。このことは古代にも遡るらしいことが静岡県伊場遺跡などで出土している目盛板から推定できるし、中世の絵巻物でも確認することができる。事例19にみられる八人小僧の名称も、これにもとづいた名称である。事例2~6, 8~11, 15・19・20・22a・24がこれに含まれる。

第4群は、雪囲いズやエリズなどの大形製品であり、全体の巾が最大2間(3.6m)にも達することがある。材質はカヤや竹で、近年ではビニールパイプも使用されている。タテ糸の間隔は粗くなり15~30cmである。錘具の個数は、雪囲いズの場合は10数個であるが、エリズの場合は数10個にものぼり、作業も第1~3群や雪囲いズと異なり、数人で行なうようになる。事例21・22b・22c・22dがこれに相当する。

3. 製品群と重量の関係

次に以上4群に分類した対象製品群と、石錘の関係を検討することとする。石錘の諸要素のうち、特に長さや太さは巻きつける糸の量と関係があり、また隣り合う石錘と錯綜しないようにする必要もある。またヨコ糸として編まれるものの材質との関係において、特に重量は重要な意味をもっている。概して第1群から第4群に向うほど、太くてかたい材質を使う傾向がみられる。

第5図はこの平均重量と対象製品群との関係を、重量の判明している18例について示したものである。これによれば製品群に対応して、第1群から第4群に向うほど順次重量が増大していく傾向が明確である。すなわち第1群では20~80gで100g以下であり、第2群は80~180g、第3群は160~300g、そして第4群は360~880gであり、それぞれ若干ずつ重なりあっている。また事例16のように、2群にまたがって使用される場合もある。



第5図 石錘の重量と対象製品群の関係

一見明確な重量の増大傾向も、もじり編み用錘具の主体を占める木製錘ともあわせて検討する必要がある。そして旧稿で紹介したように、第2群では250gに及ぶ例も少なくないし、まれに470gに及ぶ場合さえある。また第3群ではその中は110~470gと広く、第4群ではごくまれに164gという軽い例さえある(渡辺1976a・78)。

この木製錘との関係も十分考慮した上でも、なおかつこの第1群から第4群にかけての重量の増加傾向は注目し得る。同時に用いられる錘具の個数とともに、次章で検討する考古資料の解釈上に大きな手がかりを与えてくれるものとして重要である。

4. 石錘と木製錘の関係

自然石を錘具に使用することは、第一義的には川原石に豊富に恵まれることが条件となる。しかしこれ以外の選択的な意図も存在することを指摘しておきたい。

供出米をいれる米俵は、近年カマスやポリ袋にかわるまできわめて重要であったから、これを欠く農村はまず無かったといってよい。したがって、第1・2・4群にのみ石錘を用いている地域では、当然第3群用に木製錘が使われていたはずである。こうした調査は不十分であるが、たとえば事例7のように、石錘はより軽量の第2群用に、第3・4群用には木製錘が使われ、逆に第4群に石錘を使い事例22dでは、第3群用に木製錘が使われている。また事例2ではよくしめる場合に石錘が用いられている。いずれの場合も、タテ糸の間隔、巻きつける糸の量、作業能率などの総合判断から、質量の高い石錘を選択的に利用していることが明確である。素材をみきわめて使い分けを行なっているのであり、自然石を用いていることが原始的だと決めつけられない

一つの好例であるといえよう。現にこのためにやや遠隔地まで手頃な石を採集に出かけることがあることは、事例22bに紹介したとおりである。

こうした事例とは別に、事例9のように石錘が足りない時に木製錘を使う場合もあり興味深い。

5. 石錘の形態分類

最後に次章の考古資料との比較検討に備えて、民具の場合の石錘の形態分類を行ない、関連する問題点を検討しておきたい。

民具にみられる石錘は、次のA～Dの4類に分類され、A・B類のみはさらに2つに細分される。

A類 川原石のまままったく加工のみられないもので、もっとも普遍的である。さらに次の2種に細分される。

Aa類 すべすべした扁平または丸い川原石。大きさは大小あり、対象製品群も各群に及ぶが、特に第1・2群は本類が主体となる。事例1・12～14・16～18・22aがこれに含まれる。このうちすべり止めとして、12・17には布が巻きつけられ(写真10・17)、18には紙が貼られている(写真19)。

Ab類 長目の川原石で、すべすべした例の他に、角礫質のものも多い。概して大形で、長さは9～12cmの範囲である。対象製品は若干第2・4群に及ぶが、第3群に顕著である。事例2～8・10・11・15・19～21・22d・24が含まれる。

B類 A類に紐かけを施した例で、次の2種に細別される。

Ba類 Ab類の紐かけ部分に、若干の粗い打欠きが施されたもの。同様に概して大形で、長さは9～12cmの範囲である。対象製品は第3・4群であるが、特に第4群に顕著である。事例9・22b・22cにみられる。

Bb類 Aa類の紐かけ部分にきれいな切目の施されたもの。事例12(写真8)にのみみられる。小形で第2群用である。

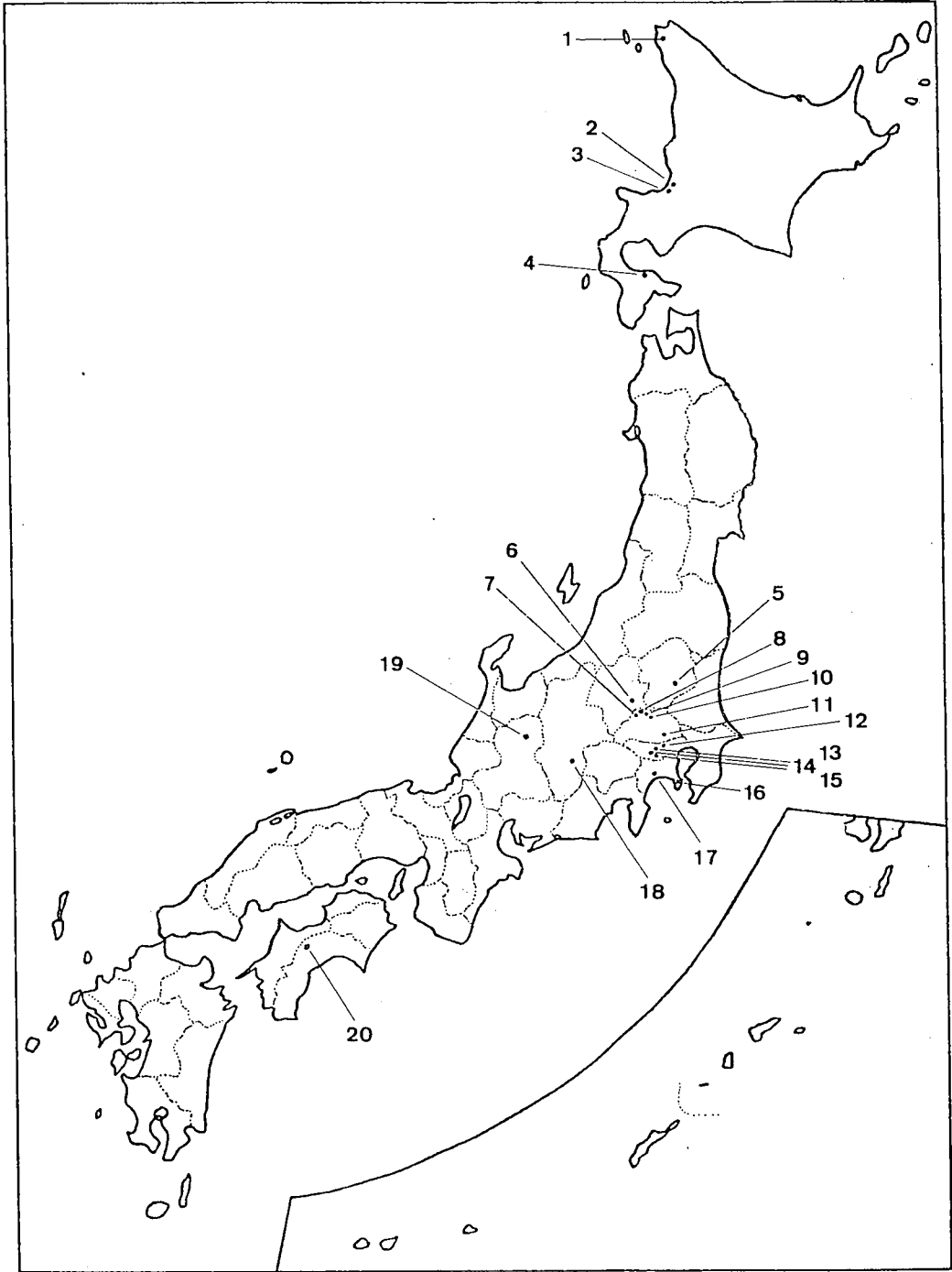
Ba・Bb類ともに、A類と混在して一群をなして使用されているところが、きわめて興味深い。

C類 紐(ちのわ)をかける部分に、溝が一周している形態で、木製錘の丸太形のタテ形(写真30-3)に共通する。事例23(第4図)にのみみられる。第2群用。

D類 古代の石器を転用した例で、事例8のみである。

以上の4類のうちD類を除くと、A・B類はヨコ形で、C類はタテ形といえる。考古資料では、漁網錘とみなされる例を除いてはBb・C類は皆無である。特にC類は、木製錘からの逆影響が推定される。Ba類に相当するものとしては、礫石錘が多数みられる。

そして単独出土ではまったく自然石扱いにされてしまうA類も、多数出土しているのである。しかもその使用、収納の状態を明示している場合ですら、発掘現場では十分に注意されていなかったのであり、研究者の関心を強く惹起したいと考える。



第6図 編み物用石錘出土遺跡分布図

Ⅲ 考古資料の検討

考古資料についても、まず北から順に具体的な事例を紹介することとする(第6図)。各事例については、a. 出土状態、b. 編年の位置づけ、c. 形態学的特徴、d. 重量などを重点に紹介し、あわせて記録の不徹底さをも指摘していきたい。

A 各地の事例

1. 北海道天塩郡豊富町豊富遺跡

本遺跡第4号住居址(擦文期)は、火災により廃絶した住居址で、東壁南寄りにかまど(第7図12)をもつ。この『窯の付近すなわちこの南側と西側には長径5糎、厚さ3糎前後の扁平な河原石を各々敷きつめ、または集積した状態が認められた。なお石の数は南側は102ヶで敷いており(同17)、西側は43ヶで堆積した状態が認められた(同16)。おそらく前者は一種の部分的敷石住居の様式であるように考えられるし、また後者は或は織物器の錘石であるように考えられる』(児玉・大場1959)。

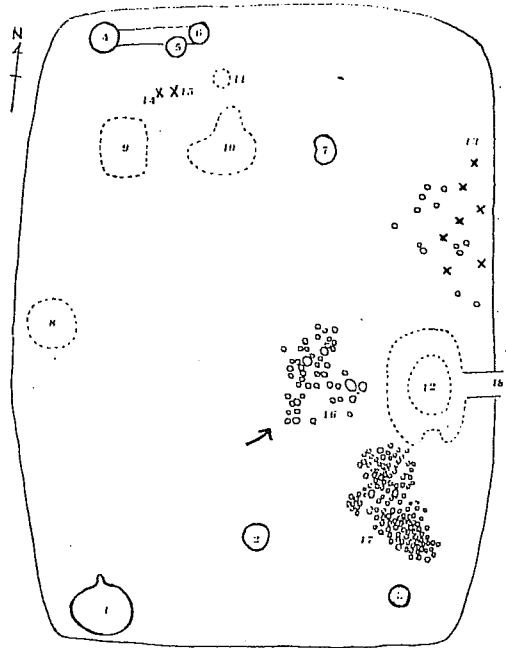
これらの石錘のサイズ・重量などの記載はみられないが、写真より推定するとやや大き目の川原石らしい。

2. 北海道石狩郡石狩町ワッカオイ遺跡

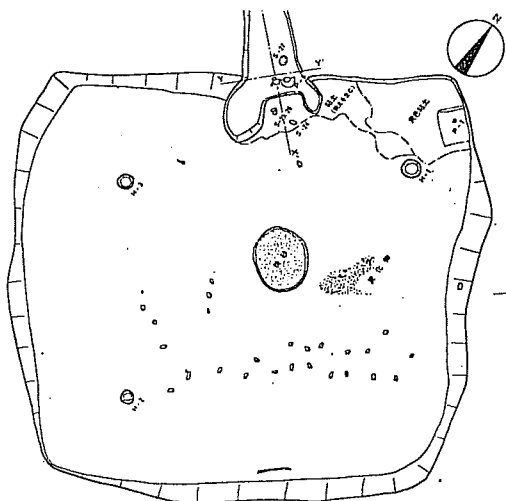
本遺跡は縄文文化期の土墳墓群と擦文文化期の集落址であり、擦文期6住居址すべてより石錘が出土している(横山・石橋編1975)。

a. 第1号住居址

『床面および周辺から、礫46個』が散在した状態で出土したと報告されている。写真によると円礫で、計測表は卵形小石と記されている。長さは5.7~9.5cmで平均7.6cm、巾は3.0~5.3cmで平均4.4cm、厚さは1.7~4.1cmで平均3.0cm、重量は82~231gで平均147gである。



第7図 豊富第4号住居址実測図



第8図 ワッカオイ第3号住居址実測図

b. 第2号住居址

かまどのある北東壁とは反対側の南西壁側床面から56個の卵形の川原石が出土している。計測表によれば、長さ7.2~10.6cmで平均8.7cm、巾3.0~6.3cmで平均4.7cm、厚さ1.8~4.4cmで平均3.1cm、重量72~289gで平均176gである。

c. 第3号住居址(第8図)

床面から32個の石錘が出土しているが、『特に、南側には16個の礫が2列に比較的等間隔に並んでいる』。カマドは北側にある。列の長さは約2m、石の間隔は約20cmである。これらが仮りに使用中などの状態を示しているとする、やや大形の製品を編んでいたことが推定されてくる。

これらの計測値は、長さ6.9~10.1cmで平均8.0cm、巾3.1~9.6cmで平均3.5cm、厚さ1.8~3.8cmで平均2.7cm、重量82~230gで平均131gである。

d. 第4号住居址

出土状態は不詳であるが、床面から6個の石錘が出土している。その計測値は、長さは6.4~8.7cmで平均7.5cm、巾3.6~6.2cmで平均4.6cm、厚さは2.5~3.8cmで平均3.1cm、重量は94~291gで平均167gである。

e. 第5号住居址

かまどのある北壁とは反対側の南西壁側の床面より、43点の石錘が出土している。計測値は、長さは5.0~10.2cmで平均8.1cm、巾は2.8~6.2cmで平均4.7cm、厚さは1.9~4.4cmで平均3.0cm、重量は48~235gで平均163gである。

f. 第6号住居址

床面より石錘が3点出土している。長さは平均6.6cm、巾平均5.2cm、厚さ平均2.5cm、重量平均118gである。

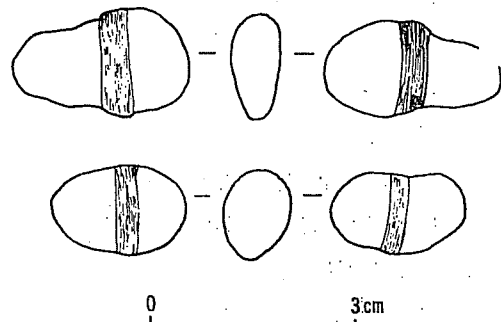
これらの「卵形小石」状石錘について、飽津博史氏は、次のように記している。

『アイヌ民族はソッカラあるいはルサと云われる莫莖を編む際にタテ糸の錘には長さ7cmぐらいの小石(ピッ)を用いている。このことから「卵形小石」は莫莖を編む際に用いる小石ではないかと考えられる。』

3. 北海道札幌市手稲遺跡

本遺跡は縄文後期中葉の加曾利B式期並行期の遺跡である。報告書に垂飾(第9図)として報告されている石製品は、編物石とみなされるものであり、次のような記載がみられる。

『大いさ長径1.5~2種前後の楕円形の一見滑沢な小石である。これらの小石は全例とも体の中央部に横環して、植物性



第9図 手稲遺跡出土石錘実測図

の繊維が密着して残存している。この事実からこれらの小石は一本の繊維で繋いで垂飾として使用したものと考えられる。なお出土状態は写真6に掲載したが数十個が一ヶ処から集団した状態で出土している。小石の石質はいずれも海浜などによくある種類の小石で、安山岩の自然石である(大場・石川1956)。」

これらの重量は記載されていないが、繊維が付着していたという所見はきわめて重要であり、その用途を端的に示しているといえよう。もっとも二次的転用としての垂飾の可能性がまったくないともいえないのである。現に民具事例12として報告した石錘は、使いこまれて真黒に光っているので、それぞれを1本ずつ紐で結んで、喫茶店『京』に飾られていたのである。

4. 北海道茅部郡森町森川町貝塚

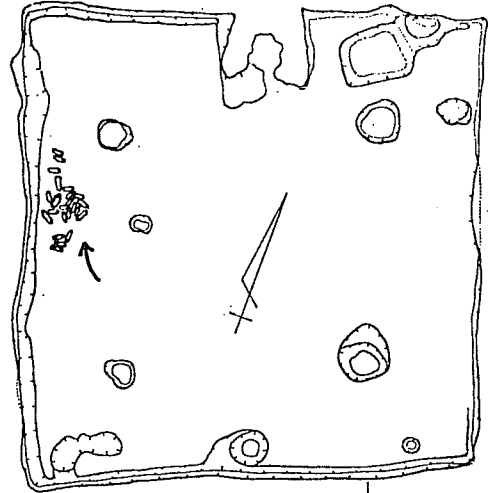
上記のワッカオイの報告書横山・石橋中において、飽津博史氏は次のような記述をしておられる。

『類似の出土例としては、吉崎昌一氏の教示によると、函館博物館の行なった茅部郡森町森川町貝塚の発掘の際に発見されている。鉄鍋のそばに小石が並列に数十個出土している。ただし時期は古くて江戸時代初期と考えられる。』

5. 栃木県河内郡上三川町大野遺跡

本遺跡は古墳時代の集落地で、I-8号住居址(古墳時代後期鬼高Ⅱ式期)は北寄りにかまどを有し、このかまどに向かって左側、すなわち西壁付近に石錘がかたまっていた出土しており、次のように報告されている(第10図)。

『この住居址で注意を引く点は、西壁付近にみられる配石である。これらは、川原石と考えられる(石は全部で28個出土した)。ほぼ西壁中央にあたる所で大部分が60×1.2mの範囲に集中していた。石の大きさは、長さ約12~20cm、巾4.5~14cm、厚さ3.2~4.5cmであった(相京他1971)。」



第10図 大野I-8号住居址実測図

6. 群馬県多野郡吉井町入野遺跡

本遺跡は古墳時代の集落地で、次の4基の住居址より、長目の川原石を利用した石錘が出土している(尾崎1962)。

a. 第6号住居址(7世紀前半)

かまどを東壁に有し、これに向かって左側に当る北半部に、『細長い河原石が相当見出されてい

るが、その意味ははっきりしない』と、報告されている。

b. 第11号住居址（7世紀前半）

『かまどは明瞭にそれと認めうるものはない。北壁やや西寄り，南壁東寄り，西南隅，及び西壁南寄りの各所に相当多量の焼土，及び焼石が認められる。特に北壁は焼土の量及び焼石の出土が多いこと本遺跡に於ける他の住居跡の例との関連から見て，かまど所在の可能性が最も強い。かつ，本遺跡多に見られる焚口に石を用いたものと推定できよう。……住居の南東，壁ぎわには，意識的に並べたと見られる径15糎×5糎位の川原石が10個程置かれていた。』

c. 第14号住居址（7世紀末）

東壁にあるかまどに向って右側に当る西南隅に，川原石がまとまって出土しており，その数は写真および実測図（第11図）より14個と推定される。その大きさは15cm×10cmほどで，その置かれた位置は特異であり，次のように報告されている。

『壁について床面から9糎高く，巾40糎，長さ南北に85糎のほぼ四角の壇状のものが築かれているのであり，この石の下は床面とは異なる黒色土で固められていたようである。』

d. 第17号住居址（7世紀前半）

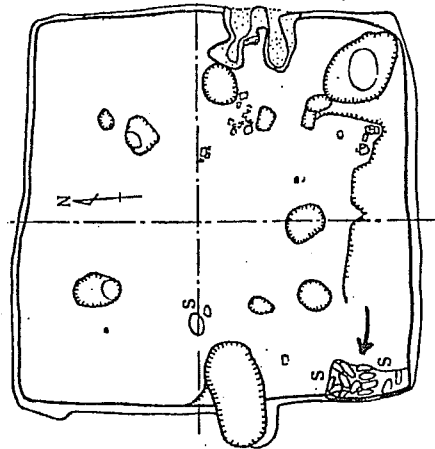
第14号住居址と同様にかまどは東壁にあり，『西南隅に長径15糎ほどの川原石を数個認めた』と，報告されている。

すなわち石錘の出土地点は，第6号住居址を除き，すべてかまどに向って右側であり，かつかまどより遠いコーナーに近接していて，住居空間の利用法に関して，一定の傾向を認めることができる。

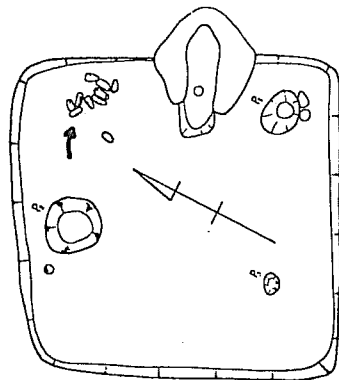
7. 埼玉県児玉郡神川村中道遺跡

本遺跡は古墳時代後期を主体とする集落址であり，このうちの第22号住居址（鬼高Ⅱ式）より石錘が出土している（第12図）。

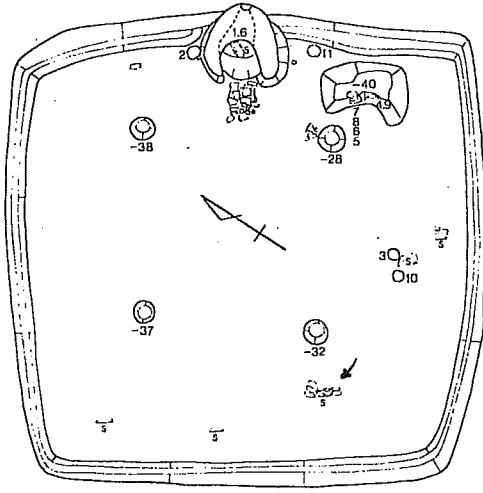
かまどを北東壁中央に有し，石錘はそのかまどに向って左側の北東隅付近に，『15cm×7cm程の横長の河原石が9個まとまって見られた』（菅谷他1974）。



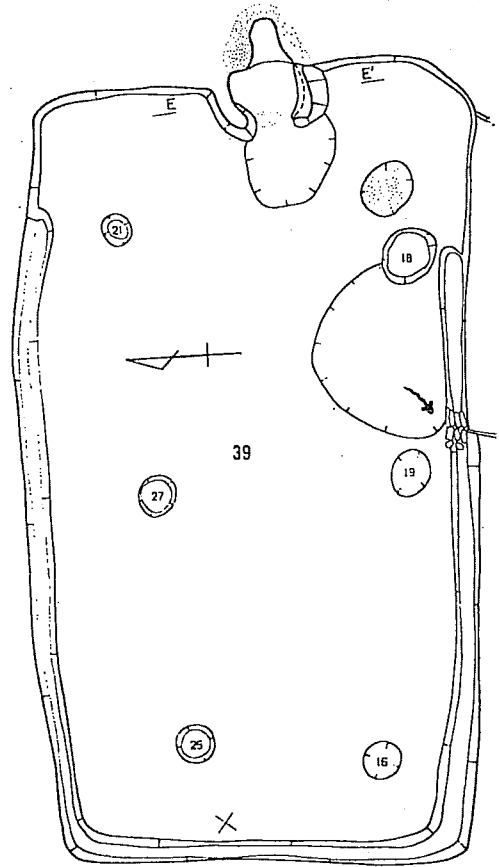
第11図 入野第14号住居址実測図



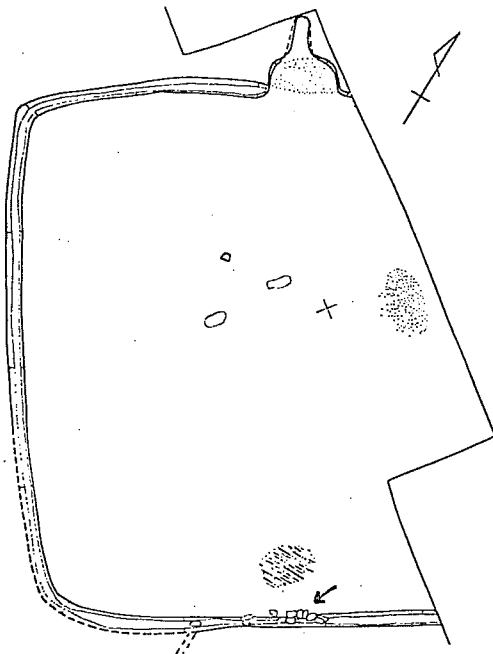
第12図 中道第2号住居址実測図



第13図 下田第43号住居址実測図



第15図 古川端第39号住居址実測図



第14図 古川端第10号住居址実測図

8. 埼玉県本庄市下田遺跡

本遺跡は古墳時代を主体とする集落址であり、このうちの第43号住居址（鬼高Ⅱ式期）より、長目の川原石を利用した石鏝が出土している（第13図）。

かまどが北東壁中央に寄り、これに向って右側で、『南西柱穴と壁のほぼ中間地点に、長方形に近い礫が、3個・2個・2個・2個と列状に出土しているのが注意を引く。礫は、

南東壁中央部付近の6個が比較的まとまっており、単独の2個をあわせると合計17個の礫が出土している』（柿沼他1979）。

この列は実測図から推定して約36cmであり、使用状態を示しているとすれば、タテ糸の間隔は約4.5cmであり、対象製品は中形のものが推定される。

9. 埼玉県本庄市古川端遺跡

本遺跡は古墳時代から平安時代に及ぶ集落址であり、このうち古墳時代後期の第10号住居址(鬼高Ⅲ式期)と、平安時代の第39号住居址(国分式後期)より石錘が出土している(小久保他1978)。

a. 第10号住居址(第14図)

かまどと正反対の東南壁中央部に『周溝に沿って長さ10cm, 巾5cm内外の自然礫が12個並んで出土した』。このうち1個は列を離れているが、他は近接している。これが使用状態を示すとすれば、その長さは約80cmであり、5等分するとタテ糸の間隔は約13cmとなり、対象製品はやや大形品といえよう。

b. 第39号住居址(第15図)

東壁中央にあるかまどに向かって右側の、南壁のほぼ中央部の『周溝上に長方形自然礫が10個まとまって出土している』。計測値・重量等の記載はみられないが、写真によれば、第10号住居址と同様に、長目の自然石である。

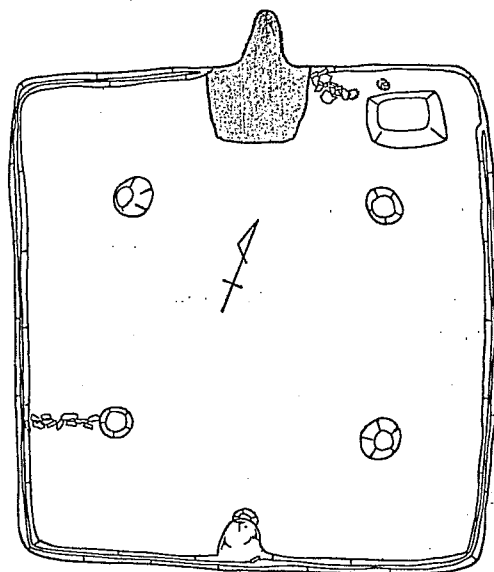
10. 埼玉県大里郡岡部村水窪遺跡

古墳時代前期の第5号住居址(五領式期)の床面より、写真によると長目の川原石を用いた石錘が7個出土しているが、住居内の位置は不明である(栗原・佐藤1976)。

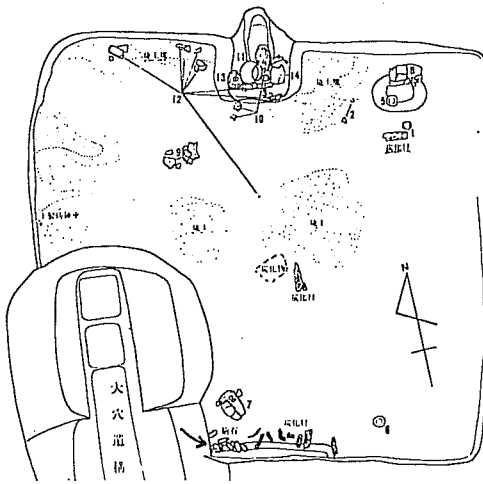
11. 埼玉県川越市上組遺跡

古墳時代後期の第2号住居址(鬼高Ⅲ式期)より、興味深い状態で石錘が出土している(第16図)。北壁中央にあるかまどに向かって左側の、『西壁と南西側柱穴との間に5cm×15cmほどの細長い礫が並べられていた』(今泉1974)。

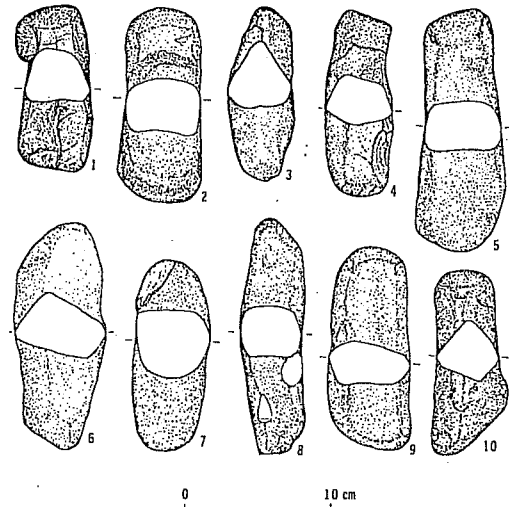
写真によれば、やや長目の川原石12個が2列に並んでいる。あたかも目盛板を壁と柱穴とにくくりつけて、作業を行なっているような状態を示している。目盛板の長さは、実測図から推定すると少なくとも80cm以上あり、その間隔は約13cmである。古川端第10号住居礫と近似したサイズであり、対象製品は同様にやや大形製品といえよう。



第16図 上組第2号住居址実測図



第17図 吉祥山第8号住居址実測図



第18図 吉祥山第8号住居址出土石錘実測図

12. 東京都武蔵村山市吉祥寺遺跡

古墳時代後期鬼高式期に属する第8号住居址の床面より石錘が10個まとまって出土した(橋口編1979, 80)。その位置は北壁中央に位置するかまどとは逆の、南壁中央よりやや西側の位置である(第17図)。『これらはすべて硬砂岩質で、長方形を示し、長さは11~16cm, 重さは250~303gを計る。断面もほとんど方形である』(第18図)。

13. 東京都八王子市中田遺跡

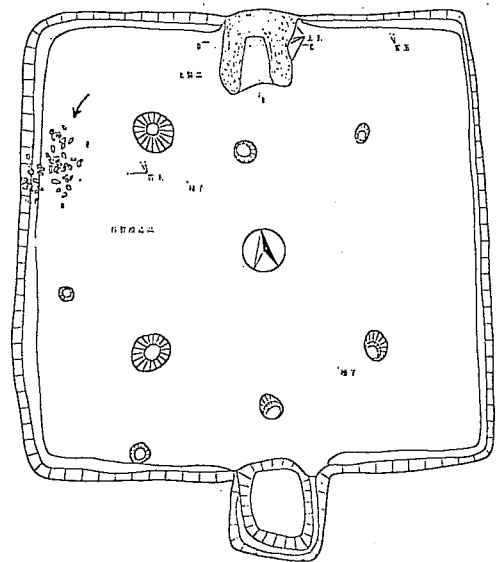
本遺跡は弥生時代から奈良時代にかけての集落址であり、次の7住居址より、川原石を用いた石錘が出土している。なお実測図・計測値の記載はみられない(中田調査会1967, 68)。

a. C3号住居址(古墳時代後期・鬼高I式期)

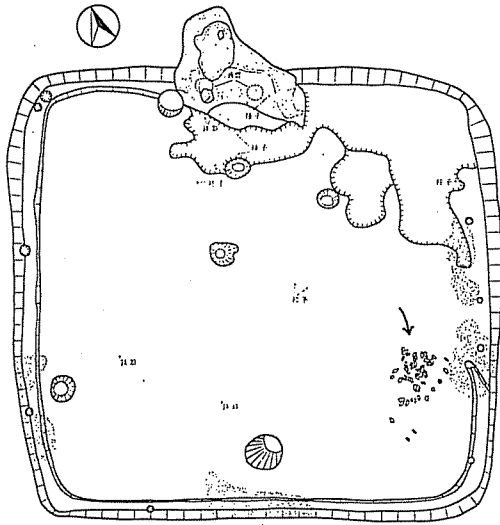
北壁中央に位置するかまどに向って、左側の、やや奥寄りの壁際の床面に52個の石錘が集中して出土した(第19図)。

b. C12号住居址(奈良時代・真間式期)

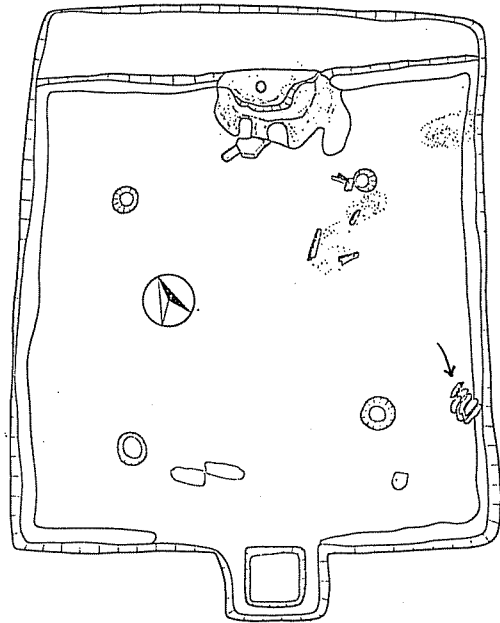
北壁中央に位置するかまどに向って右側の、手前寄りの壁際の床面上に、54個の石錘が集中し



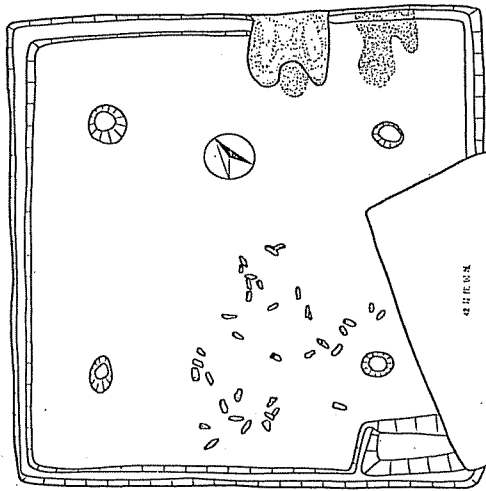
第19図 中田C3号住居址実測図



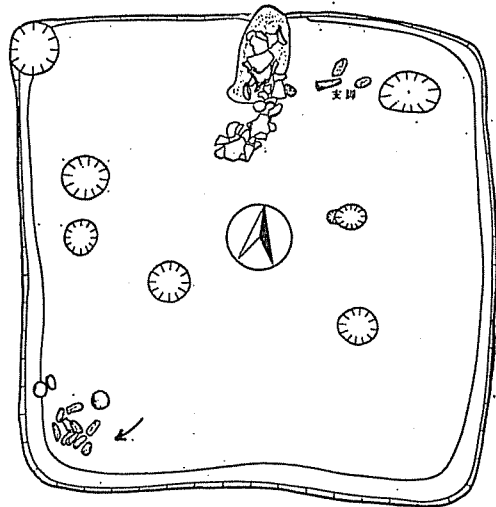
第20図 中田C12号住居址実測図



第21図 中田C13号住居址実測図



第22図 中田D13号住居址実測図

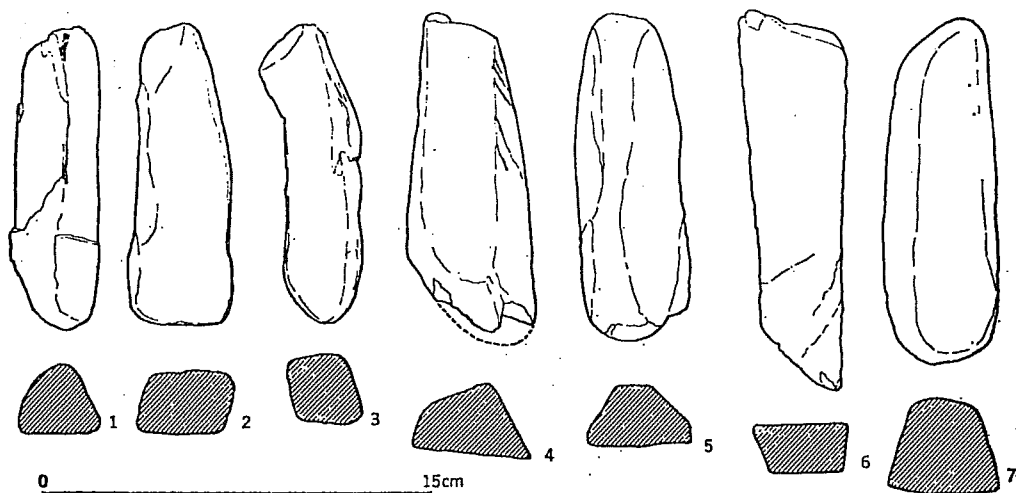


第23図 中田D36号住居址実測図

て出土した(第20図)。

c. C13号住居址(古墳時代後期・鬼高I式期)

同様に北壁中央に位置するかまどに向かって右側の、手前寄りの壁際の床面に、6個の石錘が積み重なって出土した(第21図)。



第24図 船田E42号住居址出土石錘実測図(船田調査会1970より)

d. D13号住居址 (古墳時代後期・鬼高Ⅱ式期)

北東壁中央に位置するかまどと逆の、南西側の、やや東寄りの床面に、37個の石錘が散乱した状態で出土した(第22図)。

e. D36号住居址 (古墳時代後期・鬼高Ⅲ式期)

北壁中央に位置するかまどに対し、南西隅壁際の床面より10個の石錘が集中して出土していた(第23図)。

f. E2号住居址 (古墳時代後期・鬼高Ⅰ式期)

東壁中央に位置するかまどに対し、西南隅の床面より11個の石錘が集中して出土している。

g. E18号住居址 (奈良時代・真間式期)

北壁のやや東寄りに位置するかまどに近接した東北隅寄りの床面より、11個の石錘が集中して出土している。

14. 東京都八王子市船田遺跡

本遺跡は縄文時代から古墳時代の各期に及ぶ集落址であるが、古墳時代に属す次の住居址から、編物石の名称のもとに角礫質の川原石を用いた石錘が出土している。このうち9住居址は未発表資料であり、事前に紹介することを御快諾下さった服部敬史氏に感謝の意を表する次第である。

a. E42号住居址 (古墳時代前期・五領期)

本例のみ報告されている(船田調査会1970)。住居址の主軸は北西—南東で、炉址は北西寄りであるのに対し、編物石は南東隅にややまとまって10個出土している。実測図(第24図)には7個図示されており、長さは11.0~14.8cmで平均12.9cm、巾2.7~4.6cmで平均3.6cm、重量は90~360gで平均213gである。

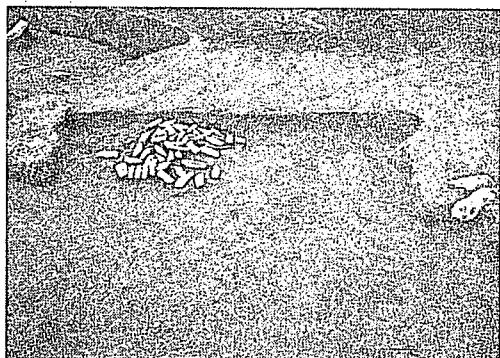


写真31 船田B42号住居址内石錘出土状態(服部氏提供)

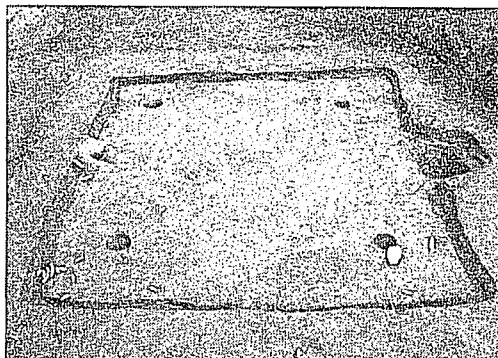


写真32 船田C5号住居址(同)

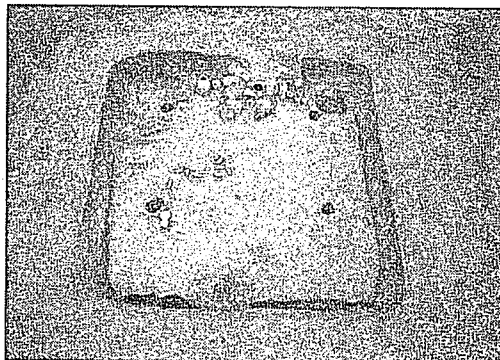


写真33 船田C47号住居址(同)

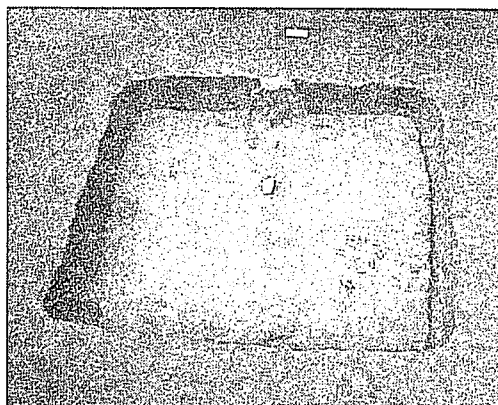


写真34 船田D38号住居址(同)

b. B42号住居址 (古墳時代後期・鬼高式期)

かまどなどとの関連における住居内での位置は不明であるが、壁際に54個集中して出土している(写真31)。重量は75~375gで平均184gである。

c. C5号住居址(同期)

かまどに向って左奥のコーナーに少なくとも12個、かまどとは逆の入口部ピット両側の壁に5~6個が集中して出土しており、全体では30個出土している(写真32)。重量は100~500gで平均271gである。

d. C47号住居址(同期)

かまどに向って住居内中央やや西側に、石錘が8個散乱して出土している。その数からみて、作業状態などを示しているとみなされる(写真33)。

e. D21号住居址(同期?)

住居内での位置は不明であるが、14個出土している。重量125~550gで平均298gである。

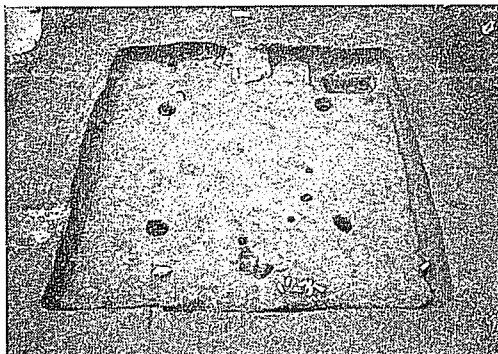


写真35 船田D42号住居址(同)

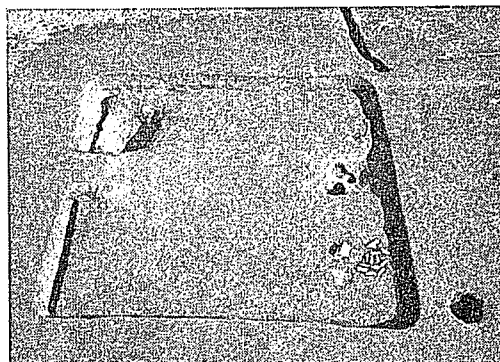


写真36 船田D74号住居址(同)

f. D28号住居址(同期?)

住居内での位置は不明であるが、12個出土している。重量は175~575gで、平均348gである。

g. D38号住居址(同期)

かまどに対し右側手前の床面に、13個の石錘が散乱して出土している(写真34)。

h. D42号住居址(同期)

かまどに対し反対側の右寄りの壁際に、8個の石錘が横長に集中して出土している。作業状態を想定させる状態である(写真35)。

i. D74号住居址(同期)

かまどに対し反対側の左側の壁際に、14個の石錘が集中して出土している(写真36)。

j. D87号住居址(同期)

同じくかまどに対し右側手前の床面に、17個の石錘が集中して出土している(写真37)。

k. E20号住居址(同期?)

住居内での出土状態は不明であるが、16個出土している。重量は250~700gで、平均445gである。

l. E31号住居址(同期?)

同様に24個出土した。重量は175~550gで、平均284gである。

m. E35号住居址(同期?)

同様に18個出土した。重量は125~425gで、平均279gである。

n. E77号住居址(同期?)

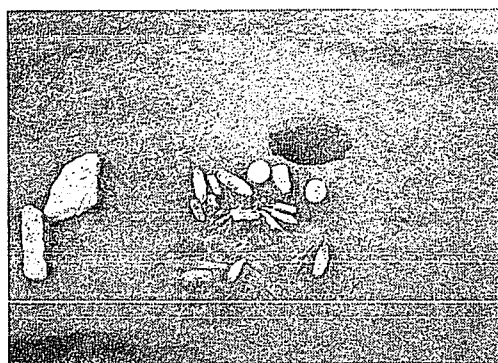


写真37 船田D87号住居址(同)

同様に15個出土した。重量は125~420gで、平均253gである。

o. E83号住居址(同期?)

同様に16個出土した。重量は150~450gで、平均298gである。

15. 東京都八王子市柵田遺跡

柵田遺跡第I地点は奈良平安時代の集落址であり、このうちの奈良時代真間期に属する第1号住居址より石錘が出土している(柵田調査会1975)。

これらは北壁中央のかまどとは逆の南壁寄りの東側半分に集中している(写真38)。角礫ともいべき川原石を用いており、総数33点である。長さは11.4~16.6cmで平均14.0cm、重量は118~509gで平均324gである(写真39)。

16. 神奈川県横須賀市長井小学校遺跡

古墳時代前期五領式期に属する第1号住居址より、川原石を用いた石錘が『南西コーナー付近の床面に……約30個が集中して検出されている』(小出・滝沢1979)。炉は地床炉で、東西方向の主軸の西寄りに存在する。したがって炉址に向かって西側の奥壁寄りに位置しているといえよう。

17. 神奈川県泰野市草山遺跡

古墳時代後期鬼高式期に属する第4・6号住居址より、川原石を用いた石錘が出土している。実測図・計測値の記載はみられないが、写真より見てやや長目の川原石である(山本他1976)。

a. 第4号住居址

『南壁際の覆土下層より細長の石が数個まとめて出土して』いる、と記されているが、本住居は西半が失なわれているため、かまど等と対比した位置関係は不明である。

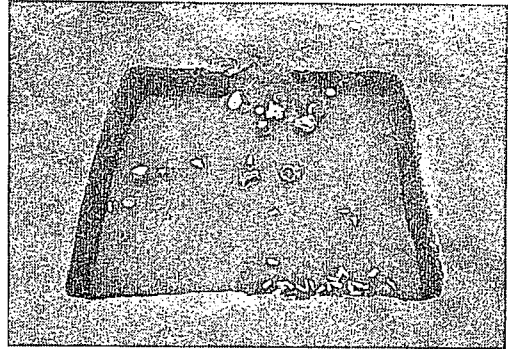


写真38 柵田第1号住居址(同)

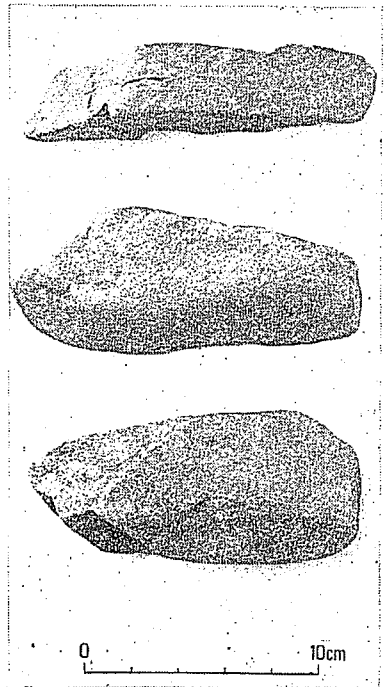
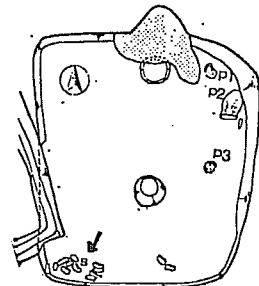


写真39 柵田第1号住居址出土石錘



第25図 草山第6号住居址実測図

b. 第6号住居址(第25図)

北壁中央にあるかまどに対し、『南西コーナー寄りに長さ10cm前後の横長の石が十数個出土しており、4号住と類似している』と、記されている。

18. 長野県伊那市福島遺跡

本遺跡は平安時代(10世紀中頃)の集落址であり、次の7住居址より、川原石を用いた石錘が出土している(大川編1968)。

a. A6号住居址

住居址における位置は不明であるが、長さ9~10cmの石錘が2個出土している。

b. B16号住居址

住居内における位置は不明であるが、長さ10~12cmの石錘が2個出土している。

c. C7号住居址

西壁中央に位置するかまどに対し、東壁の中央壁際に多数の石錘が出土した(写真40)。実測図(第26図)には、15点掲載されており、長さは5.4~10.8cmで平均7.4cmである。

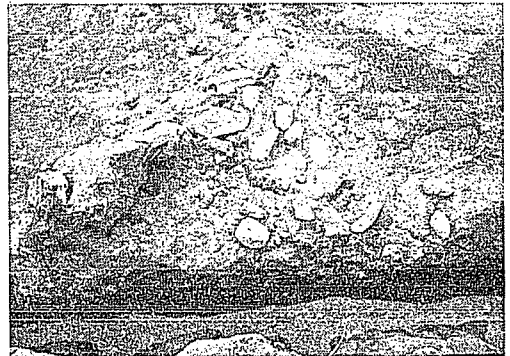
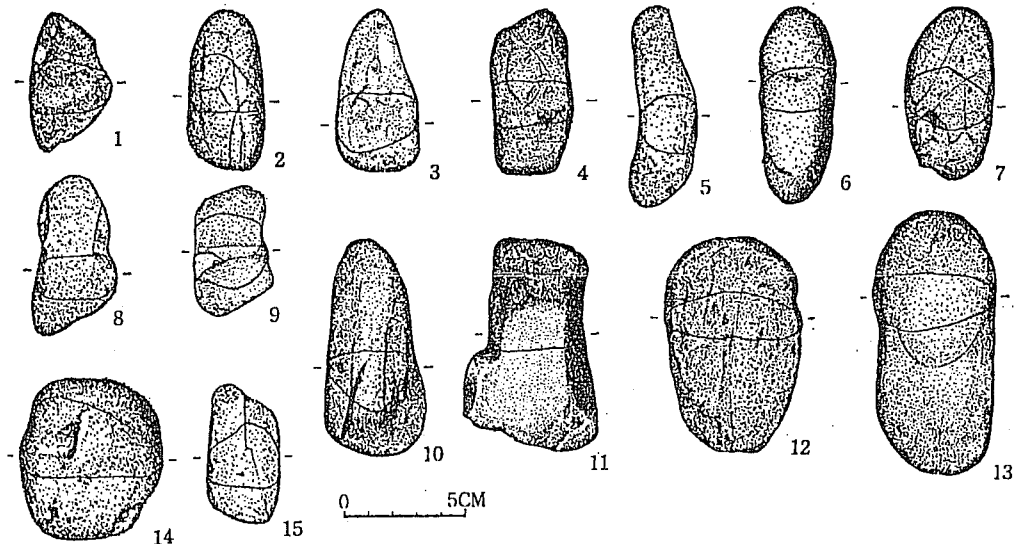


写真40 福島C7号住居址における石錘出土状態
(大川清氏提供)

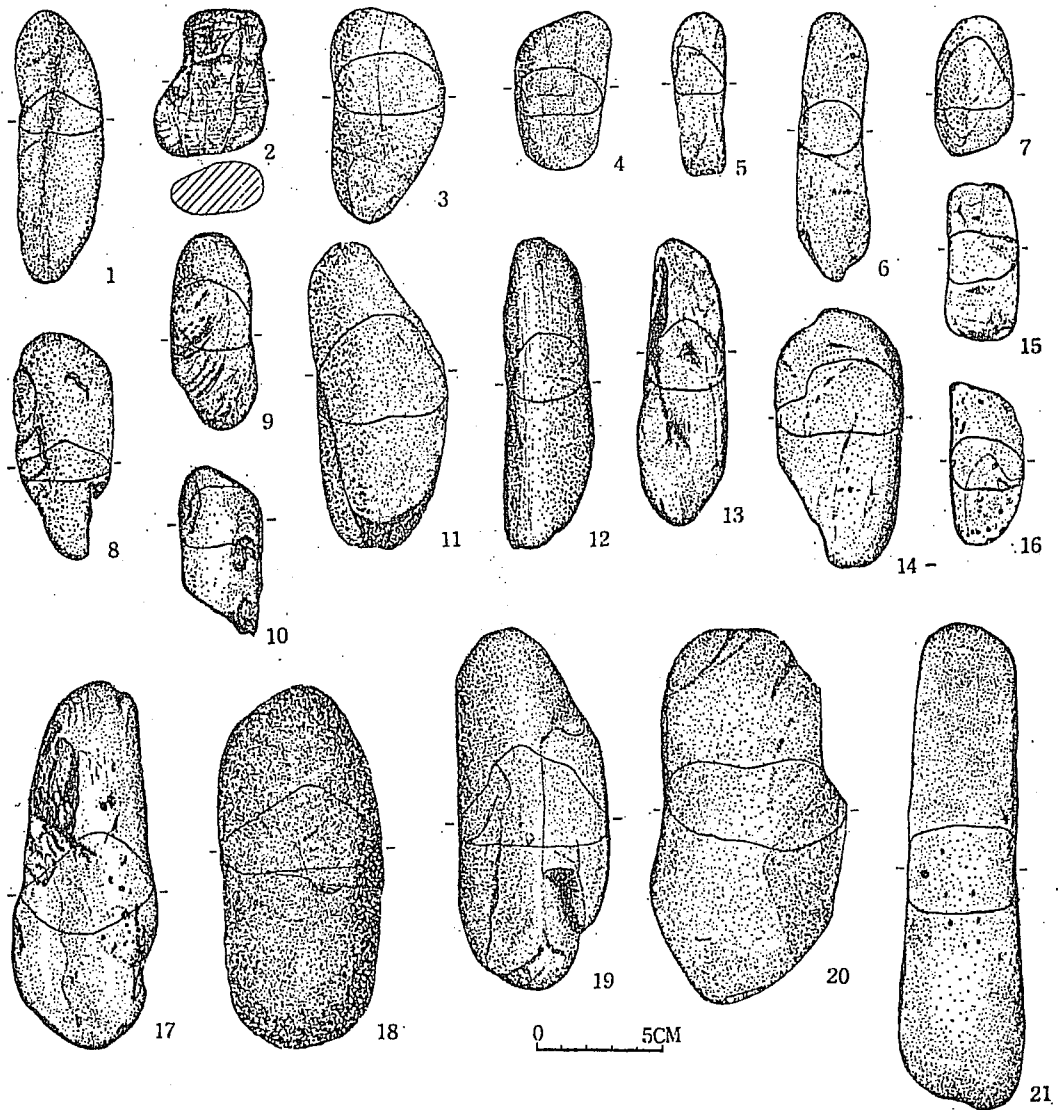


第26図 福島C7号住居址出土石錘実測図

d. C9号住居址

C8号住居址に切られた西壁に、かまどがあったと推定されており、このかまどに向って右側の東北隅に石錘がまとまって出土している。実測図(第27図)には21個掲載されており、長さは5.7~19.1cmで、平均10.0cmである。

なお興味深いことは、これらは向きを直角に異にする2群に分かれていることである(写真41)。すなわち10個と12個に分けられて収納されていたことから、使用時の単位も推定すること



第27図 福島C9号住居址出土石錘実測図

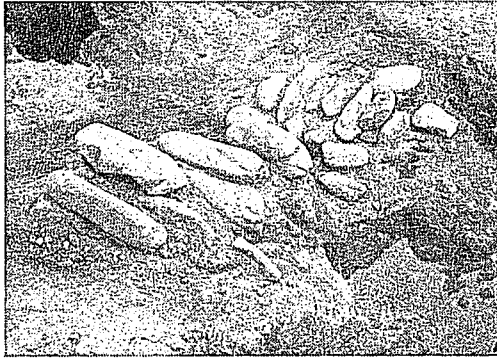
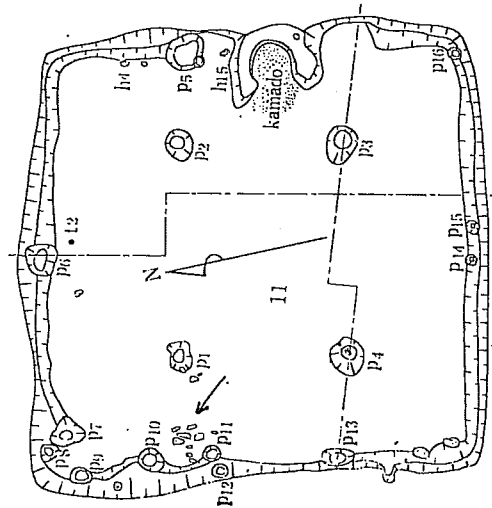


写真41 福島C9号住居址内における石錘出土状態
(大川清氏提供)



第28図 福島D11号住居址実測図

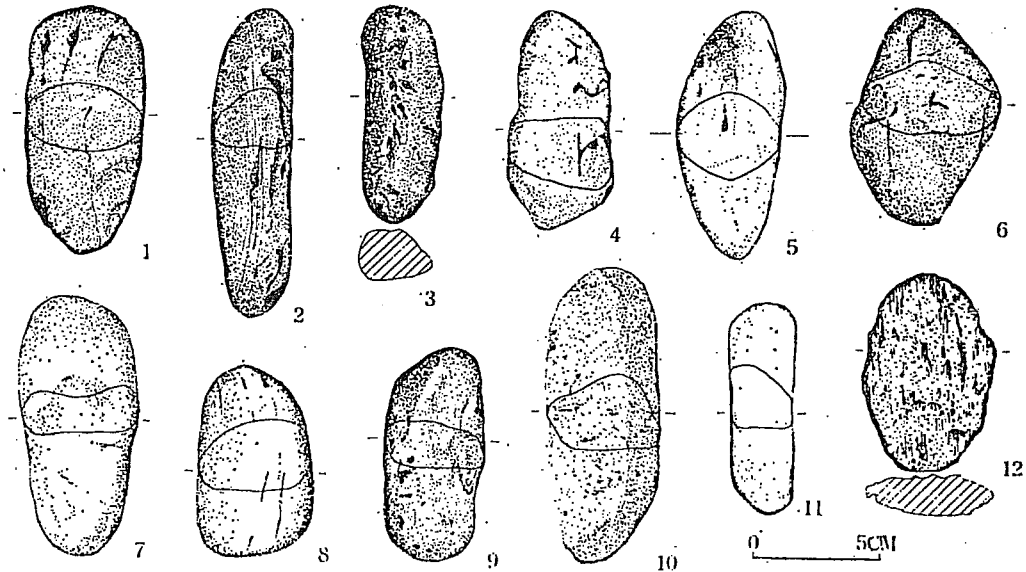
ができる。

e. D11号住居址

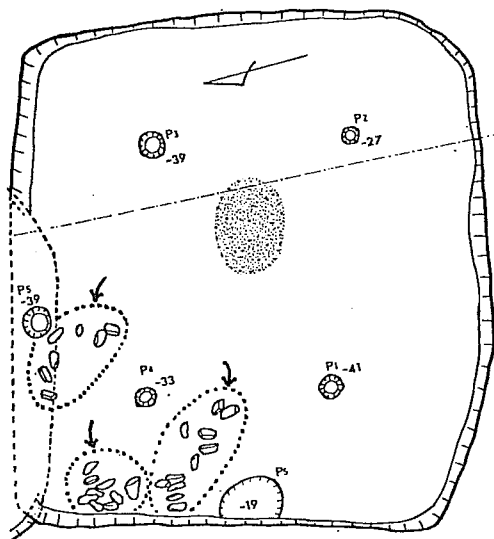
東壁中央に位置するかまどとは逆の、西壁の北寄り壁際に、石錘が12個出土している(第28図)。これらの長さは5.7~11.7cmで、平均8.8cmである(第29図)。

f. D12号住居址

住居内での位置は不明であるが、長さ8~10cmの石錘が2個出土している。



第29図 福島D11号住居址出土石錘実測図



第30図 ツルネ第3号住居址実測図

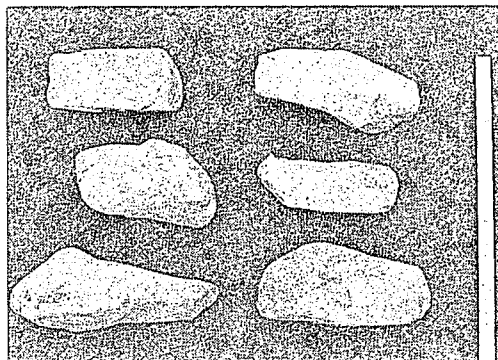


写真42 ツルネ第3号住居址出土石錘

g. D14号住居址

住居内での位置は不明であるが、長さ9～10cmの石錘が2個出土している。

19. 岐阜県高山市ツルネ遺跡

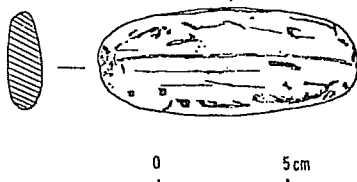
弥生時代後期に属す第3号住居址より石錘が29個出土した(高山考古研1978)。本住居址は主軸が東から西へ向い、その東寄りに炉址があり、石錘は東北部の床面に3群に分かれて、全体としては柱穴P₄をかこむような状態で出土した。北より順に各8・9・12個に分かれ、それぞれ作業状態を示しているとも考えられる。特に南寄りの一群は直線的で、その感が強い(第30図)。

石錘は砂岩などの角礫質の川原石で、長さは10.0～17.5cmで平均14.1cm、巾は5.5～9.5cmで平均7.3cm、厚さは5.0～9.0で平均6.8cm、重量は430～1040gで平均765gである(写真42)。

20. 高知県土佐郡本川村伝氷室跡遺跡

四国山脈中の手箱山(標高1806m)の山頂をやや下ったところに、土佐藩の氷室跡と伝えられる箇所があり、岡本健児氏によって調査された。この出土品のなかに石錘(第31図)が6個出土しており「槌子」の名称のもとに次のように報告されている。

『槌子は6個とも緑泥片岩製で人工をまったく加えていない長さ10～12cm、幅中央部3.8～5cm、厚み1.2～1.3cm大の細長い自然石である。しかも丸味を持った石で、このような石は河原でないと落ちないもので手箱山中にはころがっていない。遺跡の東1300mのところにある手箱谷あたりから運んだもの



第31図 高知県本川村伝氷室跡出土石錘

であろう。槌子1つの重量は125～210gであって、横中央部に凹みのあるものを使う。用途は蓑などを編む時の錘しとして使用する。本川村では最近まで民俗例として、このような槌子を使用していた』(岡本1976)。

B 比較検討

以上の20遺跡出土の56例の資料について、前章の民具資料との関係において、問題点を検討していくこととする。

1. 分布状態

地理的分布状態は第6図に示すように、北海道から四国にかけての20遺跡より出土している。民具資料の場合と異なり、九州地方の例を欠く。そして民具資料と同様に西関東から中部地方にかけて集中するが、特に西関東に集中していることが民具とはやや異なる点である。また北海道での具体例も多い。

石錘の使用は、第一義的には川原石に豊富に恵まれることが重要な条件であるから、民具と考古資料の分布傾向が大局において一致していることは注目されよう。若干のズレは、調査密度の差異に帰因しているとみなされる。

次に時期別分布状態をみると、縄文時代後期1、弥生時代1、古墳時代34、奈良時代3、平安時代8、江戸時代2、および北海道の擦文文化期（奈良～鎌倉時代に併行）7で、各時代にまたがっており、民具とは一貫して連続しているとみなされる。

2. 研究史と名称の問題

詳細な検討を行なう前に、問題点を明確にするために研究史をふりかえてみたい。

これらの資料をはじめに報告したのは、大場利夫氏等による北海道手稲遺跡(大場・石川1956)と同豊富遺跡の報告(児玉・大場1959)であろう。特に後者の報告ではアイヌ民族の例を比較して、織物の石錘であろうと記されている。

本州では群馬県入野遺跡の報告(尾崎1962)が最初である。しかし大場氏の見解には接していないらしく、その用途については何ら言及されていない。これにつづくのが大川清氏による長野県福島遺跡の報告(大川1968)である。このなかではトイレットストーンの名で報告されていて、近年批判的な意見も出されているが、この立場は筆者はとらない。結論は異なったが民俗資料との比較検討を行なったこと、自然石をまともに正面からとりあげ、はじめてすべての例を実測図に掲載したことなどは、先駆的業績として十分に評価されるべきである。その後でも実測図の掲載がみられたのは、東京都船田遺跡と吉祥山遺跡の2例のみであり、他の大部分の遺跡では実測図のみならず、サイズや重量の計測値すら報告されていないことも指摘しておく必要がある。

さらに大場利夫・大川清氏等とは別に、八王子市周辺の発掘で出土する石錘に注意を促していた、塩野半十郎氏の努力にも注目される。この努力は服部敬史氏等に積極的に継承されることとなった。

このようにこの種の石錘の研究は各地で孤立して行なわれており、全国的な展望は不十分である。そのため比較に用いた民俗資料の種類が乏しく、用途の推定に必要な重量の記録などに不徹

底さがまぬがれない。

筆者も礫石錘やスタレ状圧痕の研究から出発して、これらの研究成果を吸収することとなったのであるが、近年次第に関心を寄せる人が増えてきたのは喜ばしいことである(柿沼1979, 橋口編1979など)。

さて全国的視野の欠除からくる欠陥として、重量・サイズなどの他に名称の問題がある。たとえば橋口尚武氏等は、次のように記している。

『これらの石錘について塩野氏は時期に関わりなく駒石と呼んでいる。語源的にはともかく、この種の錘を石錘と表現すれば漁撈用のものと間違いやすいし、いちいち敷物などの編み物用石錘とするより駒石とした方が便利である』(橋口編1979)。

しかし各地域の民俗名称をそのまま統一名称にできないことはいうまでもない。前章で紹介した名称には、ピッ(アイヌ語)、コモヅチ、コマイシ、フンド、ハバキ石、八人小僧の6種があり、コマイシはその1種にすぎず、かつ優先すべき理由は何もない。そしてこのコマイシを含めて、いずれもが統一名称とするには問題がある。まずピッは地域性が強すぎるし、コモヅチ・コマイシは木製錘の名称を踏襲しているにすぎず、フンド(分銅)は他の名称の転用であり、ハバキ石・八人小僧は特定製品名や特定数を示していて、多様性のある製品群に倣小化した感じを与えるという欠点がある。そして現状では統一名として提唱すべきよい名称に恵まれていない。さらに基本的な問題として、この種の錘具の主体となる木製錘(これはツチノコ・コマの名がもっとも普遍的)を含めて統一名を決定すべきであると考え。筆者等は目下その前提として地方名の探訪につとめている。

暫定的には、船田遺跡の報告で用いられているように、編物石とよぶのも一つの有効な方法であろう。

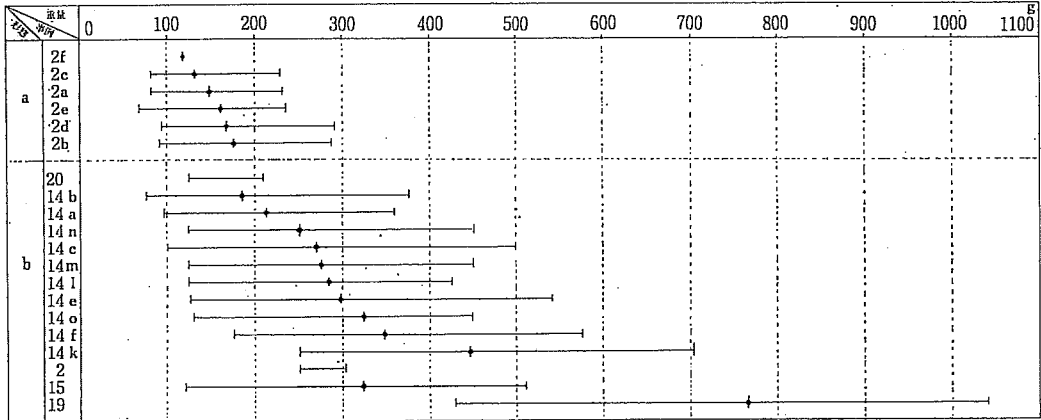
3. 石錘の大きさと重量

本章でとりあげた石錘は、すべて民具資料中のA類のみである。そしてこれらは、民具資料と同様に2類に細分される。

a類 すすべした川原石で、小形ないしやや大形である。長さは事例3では1.5~2.0cmで小形であるが、事例1では5cm, 2では6~9cmである。本類は事例4を含め、目下のところ北海道のみに出土している。

b類 長目の川原石で、すすべした例と角礫質の場合がある。本州の16遺跡例はすべて本類に属す。そして長さは、事例18では7~10cm, 9・17bでは10cm内外, 21では10~12cm, 14aでは13cm, 15・19では14cm, 6・7・11では15cm前後, 12では11~16cm, 5では12~20cmと記されており、概して大形である。

次に重量の判明しているのは、6遺跡の20例にすぎず、それぞれの数値は第32図に示すとおりである。ここでは平均値を・印、分散範囲を直線で示している。



第32図 遺跡出土石錘の重量

これによると大部分は100~450gの範囲内にはいり、事例19のみはかけはなれて765gと重い。この大多数を占める100~450gの範囲内では連続的であり、なかを細分することは困難である。この重量を民具資料と比較すると第2・3群に相当し、事例19は第4群に相当する。また100g以下の例はみられないが、事例3はそのサイズから推定して、第1群を対象とした軽量のものとして推定することができる。大きさ・重量の記載のない諸例についても、写真等からみてほぼ第2・3群に対応するものと推定することができる。

この第2・3群の具体的な製品との関係は、一括出土の石錘の個数からも類推が可能である。

4. 出土状態の検討

自然石が編み物用錘具として使用されたことは、主としてその出土状態から確認されたことである。その出土個所は主に竪穴住居址内で、これに準じて考えられるのは氷室跡という事例20である。また事例3は糸が残存していたため、純粋に形態学的に判断できた非常に珍しい例である。この例は大きさから第1群を対象としていると考えられるが、その個数も数10個と報告されていて、これにふさわしい。

興味深いのは、作業状態を示している例が10例みられることである。いずれも石錘が2列に対してなして並んでいることから確認できる。その個数は8個の場合4例(事例8・14d・h, 19)、10個の場合1例(6b)、12個の場合3例(9・11・19)、14個の場合1例(6c)、32個の場合1例(2c)、数10個の場合1例(4)等である。奇数の場合は上下2通りに考えられるが、少ない数の方に入れて数えることとする(以下同様)。

8個の場合は、米俵・炭俵などの可能性が高い。しかし事例19の場合には第4群の重量であるから問題が残る。他の場合は第2・3群中のいずれかに特定することはできないが、数量の多い北海道の例は、花ゴザのようなコモ類が連想されてくる。

これらの作業空間は、カマドを住居址の中軸線の奥に位置するとみて(地床炉の場合もこれに

準じる), 手前右側の空間の場合が4例(6b・c, 8, 14), 同左側の場合が3例(9・11・19), 住居址の中央部に位置する場合は2例(2c, 14)あり, 他に不明が1例ある。

これらのなかには, タテ糸の間隔が推定できる場合が4例ある。

ワッカオイ第3号住居址(事例2c)では長さが約2m, タテ糸の間隔は約20cmで, やや大形の製品が推定される。下田第43号住居址(8)では長さ約36cm, 間隔が約4.5cmであり, カゴ類のような小形品が推定される。古川端第10号住居址(9)と上組第2号住居址(11)の2例はきわめて興味深い。共に長さは約80cmで, 石錘は12個で間隔は約13cmであり, コモ等の大形製品が予想される。同じ埼玉県下で時期も同じ古墳時代末期の鬼高Ⅲ式期であるが, 両遺跡間は直線距離にしても約40km以上離れているのであるから, 両遺跡を含む地域全体に, 規格の統一が行なわれていた可能性がある。

次にこれ以外の住居内における一括出土個数をみてみよう。

2, 3個といった少数例を除けば, 6個の場合7例(事例2d, 6b, 10, 13, 14, 17a, 21), 8個の場合1例(7), 10個の場合7例(9b, 12, 13e・f・g, 14a, 18d), 12個の場合4例(14f・g, 18d・e), 14個の場合4例(14e・i・n, 18c), 16個の場合3例(14j・k・o), 18個の場合1例(14m), 10数個の場合1例(17b), 24個の場合1例(14l), 28個の場合1例(5), 30個台4例(13d, 15, 16), 40個台3例(1, 2a・e), 50個台4例(2b, 13a・b, 14)等であり, その範囲は広く, 製品の種類の多い第2・3群の特徴をよく示している。

ただし数の多い例のなかには, 例えば福島C19号住居址(事例18d)のように, 10個と12個とに明瞭に分離される場合もあり, 出土状態をよく検討する必要である。ツルネ遺跡第3号住居址(19)の場合も, 一応3群に分けて理解しているが, その重量がきわだって重いこと等から, 再検討の余地が残されている。

次にこれらの場合の出土状態をみると, カマドを奥壁を中央として, 1・手前右側の空間に出土する場合は9例(事例6d, 13b・c・f, 14a・g・j, 15・18), 2・手前左側の場合が7例(2b・e, 12, 13e, 14i, 17b, 18e), 3・両者のほぼ中間に位置する場合は2例(13d, 18c), 4・カマドに向かって右側の側壁のほぼ中央部の場合が1例(9b), 同じ左側中央部の場合が1例(5), カマドのある奥壁の右奥の空間に位置する場合は1例(13g), 7・同じく左奥の場合が4例(6a・7・13a・16), 8・カマドの前の場合は1例(1), 9・1+2+7の組み合わせが1例(14c)とがある。

先に作業状態を示す例としてあげたものを加えても, 奥壁と逆の手前の空間に位置する例が全体の64%を占めている。このカマドと反対の壁には入口が設けられていた可能性が強い。この入口をはいつてすぐの左右いずれかの空間を, 俵編み等の作業空間や道具置場にしていたことの多かったことが推定されてくるのである。

次項でとりあげる礫石錘についても, 近年類似した出土状態が確認されるようになってきたた

め、その用途の解明に大きな光明がもたらされることになった。

5. 礫石錘に関する考察

特に縄文時代に多い礫石錘について漁網錘とはみなし難いことを、筆者は折に触れてきたが、その上近年の発掘資料では、もじり編み用錘具とみなすことに有利な知見が増加している。具体的には、次の4遺跡5住居址の礫石錘の出土状況がそれである。

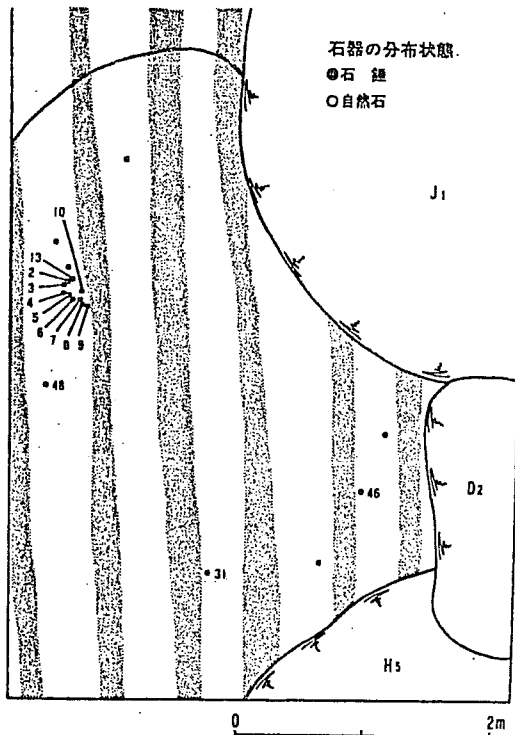
1. 茨城県東茨城郡大洗町おんだし遺跡第5号住居址（井上他1975）。

縄文中期末加曾利EⅣ式期。『石錘は、炉の北側70cmのところ、あたかも円弧をえがくかのように重なりあって10個出土した（第33図）』。10点の礫石錘は、長さ平均8.0cm、巾平均6.9cm、厚さ平均1.8cm、平均重量138.5gである（第34図1～10・13）。他に離れた状態で床面から2点出土している（第33図31・46）。

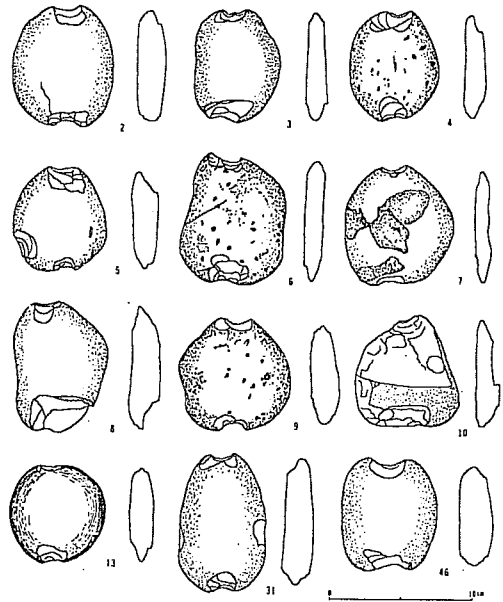
2. 神奈川県平塚市上ノ入遺跡第3号住居址（小島弘義氏御教示による）

縄文中期後半加曾利EⅡ式期。南壁寄りに礫石錘13点が重なりあって出土した。長さ平均10.2cm、平均重量383.8gである。

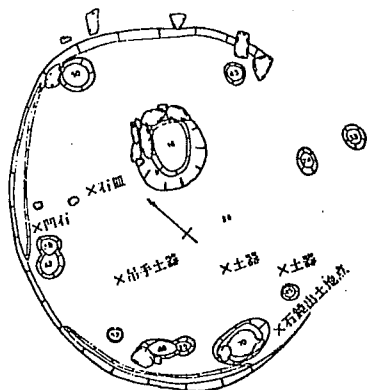
3. 同第25号住居址（同上）



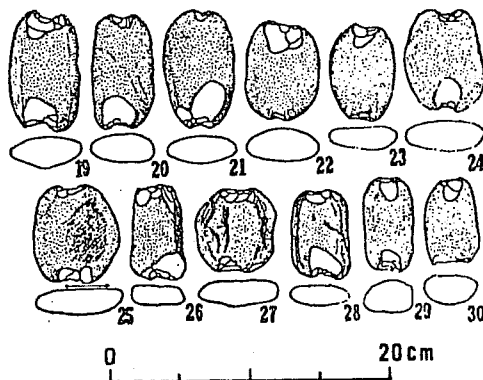
第33図 おんだし第5号住居址実測図



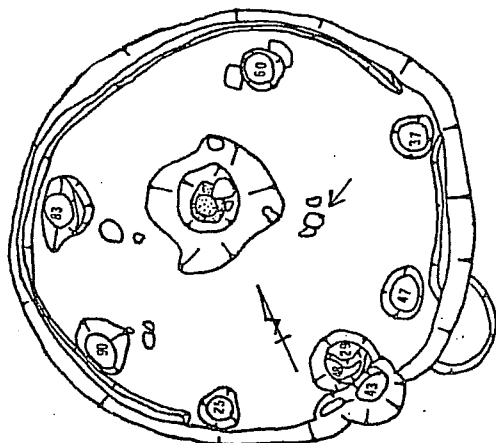
第34図 おんだし第5号住居址出土礫石錘実測図



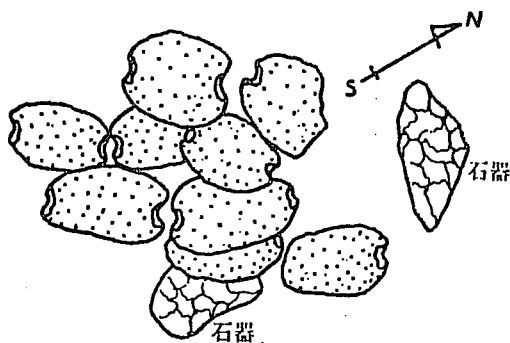
第35図 正木原 I 第 2 号住居址実測図



第36図 正木原 I 第 2 号住居址出土礫石錘実測図



第37図 前の原第 1 号住居址実測図



第38図 前の原第 1 号住居址礫石錘実測図

同じく加曾利 E II 式期。南壁寄りに礫石錘12点が重なりあって出土した。長さ平均6.4cm, 平均重量84.1gである。

4. 長野県下伊那郡高森町正木原 I 遺跡第 2 号住居址 (山岡1972)

縄文中期後半加曾利 E 式期。『南端柱穴にそって石錘が集中して12点出土した (第35図)』。計測値の報告はないが, 実測図によれば長さ平均約 7 cmである (第36図)。

5. 長野県飯田市前の原第 1 号住居址 (仮田高1974, 佐藤編1975)

中期後半加曾利 II 式期。『住居址中央東南よりの床面に石錘10個と 打石斧 2 個が集中して出土し注目される (第37・38図)』。礫石錘の計測値の報告はみられない。なおこの 2 個の打製石斧も, 民具資料事例 8 や出土状態からみて, 錘具であった可能性は大きい。そして住居址内で積み重なって出土する打製石斧についても, こうした観点から再検討してみる必要がある。

以上の5住居址例は、それぞれおんだし5号、前の原1号が10点、上ノ入25号、正木原I・2号が12点、上ノ入3号が13点ずつ重なりあって出土している。これらの数量は、漁網錘としてはきわめて不完全であるが、もじり編みの錘具としては、まさにふさわしい数である。

その重量も、上ノ入25号が84.1gで第1群と第2群の境界付近に位置する他は、おんだし5号は138.5g、上ノ入3号は383gで、第2・3群製品群に対応する重さである。

また住居址内での出土位置も、正木原I・2号・前の原1号に典型的に現われているが、炉址と入口部分を結ぶ中軸線の右側に編在しており、他の3例も同様にみうけられる。この出土位置は、前項に記した自然石利用石錘の出土位置ときわめて類似しているといえよう。

さらに民具資料に礫石錘と同様に、粗い打欠きを施した例(Ba類)が確認できたことも、編み物用錘具とみるのに有利な情報といえるであろう。礫石錘はむしろ粗く打ち欠いて、糸巻きの備えにしたとみることがよいのではないだろうか。再考を期したいと思う。

IV お わ り に

同じ物質文化の研究に従事しながら、考古学と民具学とが別個に孤立的に研究されていることは、それぞれの学問の背景と資料の性質から制約を受けることもあり止むを得ない側面もある。しかし両者を統一的に理解する姿勢が必要なことも言うまでもないことである。近年日本民具学会の結成を機に、一段とその機運が高まりつつあることは喜ばしいことである。本稿がこうした考古学と民具学を併せた学問の進展に、少しでも役に立てば幸いである。ただ両者の学問で扱う資料を、短絡に結びつけばよいという訳にはいかないのであって、その方法論の確立は緊急を要する課題である。本稿でもこのための若干の努力を行なったつもりであるが、まったく不十分なものに終わってしまった。最後に今後の課題として、改めて二三の問題点を指摘して擱筆することとする。

まず考古学の問題としては、加工痕のない自然石でも道具として十分な機能を果していることを明確に認識し、そのことを確実に情報化できるような調査姿勢を確立する必要がある。

次に民具学の問題としては、各種各様のもじり編み製品と形態差・重量差との関係を明確に意識した記録保存調査を行なう必要があることを強調しておきたい。もはや外見の形態程度の記録では、考古資料の解釈にはまったく役に立たないし、民具自体の調査としても無意味に近いといえるのではないだろうか。

こうした問題の進展のために、主流を占める木製錘の研究を進め、改めて石錘の占める位置を再検討したいと考えている。

謝 辞

最後に、本稿をまとめるに当ってお世話になった諸先学・学友の氏名を明記して、心より謝意を表する次第である（敬称略）。

安藤正義、石橋孝夫、井上義安、岩井宏実、植松なおみ、大川清、大貫英明、小沢一弘、柿沼幹夫、木本元治、栗原文蔵、小島弘義、小林康男、塩野半十郎、寺地茂、服部敬史、花村格、早川智明、福田栄治、村田文夫、藪下浩、山本暉久、吉朝則富、吉川国男。

とりわけ調査地の選定をはじめとして調査の全般に亘って御協力を仰いでいる安藤正義氏、貴重な写真や資料を御提供下さった大川清、服部敬史氏、および資料整理等に多大な御協力を頂いた植松なおみ嬢に、衷心より謝意を表する次第である。

なお報告書より実測図等を転載させて頂いた諸列について、紙数の関係で出典を本文中にのみ記したが、関係者の御寛容を乞う次第である。

引用文献目録

- 相京建史・他、1971：栃木日産遺跡。先史，7。東京。
- 飯田高校考古班，1974：飯田市竜丘桐村前ノ原遺跡調査報告。長野県考古学会誌，17，1～18頁。松本。
- 井上義安・他，1975：茨城県おんだし遺跡。茨城県大洗町。
- 今泉泰之，1974：南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影。埼玉県遺跡発掘調査報告，3。浦和。
- 大川清・編，1968：長野県伊那市福島遺跡。東京。
- 大場利夫・石川徹，1956：手稻遺跡。北海道手稲町。
- 岡本健児，1976：高知県本川村伝水室跡の調査。考古学ジャーナル，125，13～15頁。東京。
- 尾崎喜左雄，1962：入野遺跡。群馬県吉井町。
- 柿沼幹夫，1979：下田・諏訪。埼玉県遺跡発掘調査報告書，21。浦和。
- 萱野茂，1978：アイヌの民具。東京。
- 栲田遺跡調査会，1975：栲田遺跡群。八王子。
- 栗原文蔵・佐藤忠雄，1976：水窪・新井遺跡の調査。埼玉県岡部町。
- 小出義治・滝沢亮，1979：横須賀市長井小学校校庭内遺跡B地点の調査。第3回神奈川県遺跡調査・研究会発表要旨，20～23頁。横浜。
- 小久保徹・他，1978：東谷・前山2号墳・古川端。埼玉県遺跡発掘調査報告書，16。浦和。
- 児玉作左衛門・大場利夫，1959：天塩国豊富遺跡の発掘について。北方文化研究報告，14，133～180頁。札幌。
- 佐藤睦信・編，1975：前の原・塚原。飯田。
- 菅谷浩之・他，1974：中道・西北原遺跡発掘調査報告書。埼玉県遺跡調査会報告，23。浦和。
- 杉山寿栄男，1942：日本原始織維工芸史。東京。
- 高山考古学研究会，1978：ツルネ遺跡発掘調査報告書。高山。
- 中田遺跡調査会，1967：八王子市中田遺跡。資料編Ⅰ。八王子。
- ，1968：八王子市中田遺跡。資料編Ⅱ。八王子。
- 野本寛一，1975：石の民俗。東京。
- 橋口尚武・編，1979：吉祥山—武蔵村山市吉祥山遺跡第2次調査詳報。武蔵村山。
- ，編，1980：吉祥山—武蔵村山市吉祥山遺跡第3次調査詳報。武蔵村山。

船田遺跡調査会, 1970: 船田。八王子。

山岡栄子, 1972: 正木原 I 遺跡。長野県中央道文化財包蔵地発掘調査報告書, 高森町その 1. 73~76頁。松本。

横山英介・石橋孝夫・編, 1975: 石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点調査報告書。北海道石狩町。

渡辺 誠, 1976 a: スダレ状庄痕の研究。物質文化, 26. 1~23頁。東京。

——, 1976 b: 編み台とツチノコの変遷。第 3 回民具講座講演要旨。東京。

——, 1977: ツチノコの変遷。近畿民具, 1. 26~28頁。大阪。

——, 1978: 勝山市東部におけるもじり編み用鉋具の民俗調査。福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書。105~124頁。勝山。